

箱崎 46

－箱崎遺跡第67次調査の報告－

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1165集

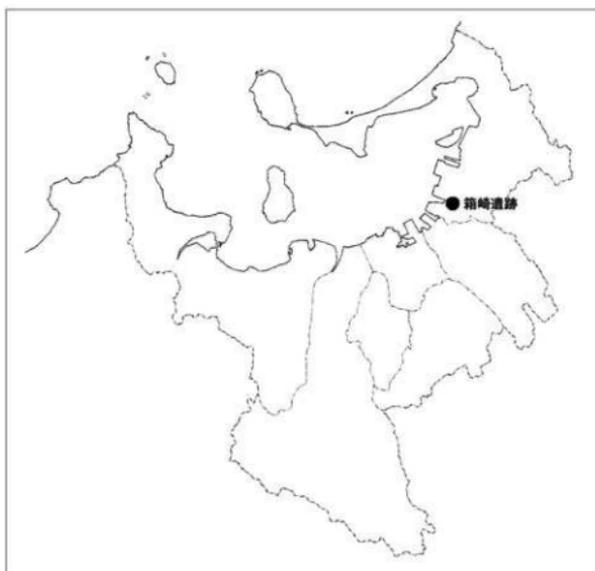
2012

福岡市教育委員会

箱崎 46

— 箱崎遺跡第67次調査の報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1165集



遺跡略号 HKZ-67
遺跡調査番号 1026

2012

福岡市教育委員会

序

玄界灘に面する福岡市は、古くから大陸との文化交流の玄関口として発展してきました。そのため、市内各所には、歴史的遺産が数多く残っています。本市は、これらを後世に残し伝え、市民の皆さまに活用していただくために、文化財の保護と活用に取り組んでいるところであります。

福岡市教育委員会では、こうした取り組みの一環として、開発にともないやむを得ず失われていく埋蔵文化財について、事前に発掘調査を実施し、その記録保存につとめています。

本書は、平成22年度に発掘調査を実施した、箱崎遺跡第67次調査の成果を報告するものです。本調査では、中世の集落遺構が発見され、貿易陶磁を中心とする多くの生活用具が出土しました。これらは、博多と並んで国内でも重要な対外交渉の窓口であった箱崎の歴史を知る上で、貴重な資料となるものです。本書が、市民の皆さまの文化財保護への理解を深める一助となると共に、学術研究にも貢献する資料となれば幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査から本書の刊行に至るまで、地権者のみなさまをはじめとして、多くの方々のご理解とご協力を賜りました。ここに心からの謝意を表します。

平成24年3月16日

福岡市教育委員会
教育長 酒井龍彦

例 言

1. 本書は東区箱崎1丁目地内における共同住宅開発事業に先だって、福岡市教育委員会が平成22年度に発掘調査を実施した箱崎遺跡第67次調査の調査報告書である。
2. 本書の執筆・編集は松尾奈緒子が行った。
3. 方位はすべて磁北であり、真北より7°西偏している。
また、座標は、日本測地系（第Ⅱ系）を用いている。
4. 遺構は、土坑をSK、ピットをSP、井戸をSE、性格不明遺構をSXと略号化して記述した。
5. 本書に掲載した遺構・遺物の実測、および写真撮影は松尾奈緒子が行った。
遺構の製図については松尾が、遺物の製図については大庭友子・松尾が行った。
6. 貿易陶磁については以下の文献の分類を参考にし、一部、佐藤一郎氏・田中克子氏のご教示を得た。
太宰府市教育委員会2000『大宰府条坊X V - 陶磁器分類編 -』太宰府市の文化財第49集
7. 鉄滓については長家伸氏のご教示を得た。
8. 附論として、福岡市教育委員会埋蔵文化財第2課 屋山洋氏による出土獣骨の分析を掲載している。
9. 本書に関わる遺物・記録等の全資料は、福岡市埋蔵文化財センターにおいて保管・公開される予定である。

遺跡調査番号	1026		遺跡略号	HKZ-67	
所在地	東区箱崎1丁目2806番地		分布地図番号	34-2639	
開発面積	915㎡	調査対象面積	359㎡	調査面積	271㎡
調査期間	平成22年9月27日～平成22年12月17日		事前審査番号	22-2-313	

本文目次

第1章	はじめに	1
(1)	調査に至る経緯	1
(2)	調査体制	1
第2章	遺跡の立地と地理的・歴史的環境	2
第3章	発掘調査の記録	4
(1)	調査の概要	4
(2)	第1面・第2面の遺構と遺物	7
(3)	第3面・第4面の遺構と遺物	26
(4)	そのほかの出土遺物	29
(5)	第4面以下の調査	36
第4章	まとめ	37
附 論	箱崎遺跡第67次調査出土動物遺存体について(福岡市教育委員会 屋山 洋)	38

挿図目次

第1図	箱崎遺跡周辺遺跡分布図 (S=1/50,000)	2
第2図	周辺調査地点 (S=1/5,000)	3
第3図	第67次調査区位置図 (S=1/500)	3
第4図	調査区南東壁土層実測図 (S=1/60)	4
第5図	第1面・第2面遺構配置図 (S=1/100)	5
第6図	第3面・第4面遺構配置図 (S=1/100)	6
第7図	SK008実測図 (S=1/30)・出土遺物実測図 (S=1/3)	7
第8図	SK190・247・248実測図 (S=1/30)・出土遺物実測図 (S=1/2・1/3)	8
第9図	SK467・529・625実測図 (S=1/30)・出土遺物実測図 (S=1/3)	9
第10図	SK200実測図 (S=1/30)・出土遺物実測図 (S=1/3)	10
第11図	SK217実測図 (S=1/30)・出土遺物実測図 (S=1/3)	11
第12図	SK120・308・410実測図 (S=1/30)・SK410出土遺物実測図 (S=1/2)	12
第13図	SK646実測図 (S=1/30)・出土遺物実測図 (S=1/3)	12
第14図	SK056実測図 (S=1/30)	13
第15図	SP610実測図 (S=1/20)	13
第16図	SP084実測図 (S=1/20)・出土遺物実測図 (S=1/3・1/4)	14
第17図	SK653実測図 (S=1/40)	15
第18図	SK653出土遺物実測図 (S=1/2・1/3)	16
第19図	SE306・307実測図 (S=1/50)・出土遺物実測図 (S=1/3・1/4)	17
第20図	SE306・307出土遺物実測図 (S=1/2・1/3)	18
第21図	SE320・321実測図 (S=1/50)・出土遺物実測図 (S=1/2・1/3)	19
第22図	SE651実測図 (S=1/50)・出土遺物実測図 (S=1/2・1/3)	21

第23図	SE651出土遺物実測図 (S=1/3)	22
第24図	SE652実測図 (S=1/50) ・ 出土遺物実測図 (S=1/2・1/3)	23
第25図	SA901実測図 (S=1/50)	24
第26図	SA902実測図 (S=1/50) ・ 出土遺物実測図 (S=1/3)	24
第27図	SB903実測図 (S=1/50)	25
第28図	SK715・717実測図 (S=1/30) ・ 出土遺物実測図 (S=1/3)	26
第29図	SX309・800・801実測図 (S=1/40) ・ 出土遺物実測図 (S=1/3)	27
第30図	SE807実測図 (S=1/50) ・ 出土遺物実測図 (S=1/3)	28
第31図	SE795出土遺物実測図 (S=1/3)	29
第32図	出土銭X線写真 (S=1/1)	29
第33図	製鉄関連遺物実測図 (S=1/3)	30
第34図	包含層・整地層出土遺物実測図① (S=1/2・1/3)	31
第35図	包含層・整地層出土遺物実測図② (S=1/2・1/3)	32
第36図	そのほかの出土遺物実測図① (S=1/3)	34
第37図	そのほかの出土遺物実測図② (S=1/2・1/3)	35
第38図	トレンチ配置図 (S=1/200)	36
第39図	第3面調査区南隅 (北西から)	36
第40図	南トレンチ出土遺物実測図 (S=1/3)	37

図版目次

図版 1	1 第1面調査区全景 (南西から)	2 第2面調査区全景 (南西から)
図版 2	1 第3面調査区全景 (北東から)	3 第4面調査区全景 (北東から)
図版 3	1～3 調査区南東壁土層 (南西から)	4 SK247・248遺物出土状況 (南西から)
	5 SK467遺物出土状況 (北東から)	6 SK200遺物出土状況 (南西から)
	7 SK217遺物出土状況 (南西から)	
図版 4	1 SE306 (東から)	2 SE306井筒検出状況 (東から)
	3 SE307 (南から)	4 SE307集水部検出状況 (南から)
	5 SE320・321 (南から)	6 SE652 (北東から)
	7 SE651 (北東から)	8 SE651井筒検出状況 (北東から)
図版 5	1 SK653 (北東から)	2 SK653土層 (南東から)
	3 SK653調査区北東壁土層 (南西から)	4 SP610遺物出土状況 (北東から)
	5 SX309 (南西から)	6 SX309調査区南西壁土層 (北東から)
	7 SK715 (南東から)	8 SE807 (北西から)
図版 6	1・2 SK056出土碗形滓 (平面・断面)	3 第22図 8
	4・5 第16図 3	6 第23図 13
	7 第18図 11	8 第21図 2
	9 第23図 20	10 第37図 22

第1章 はじめに

(1) 調査に至る経緯

福岡市教育委員会文化財部は、文化財保護法の趣旨に基づき、埋蔵文化財の適切な保存をはかるため、開発事業に対する事前審査を行い、開発により埋蔵文化財が失われる場合には記録保存のための緊急発掘調査を実施している。

平成22年7月1日、共同住宅建設に先立ち、福岡市東区箱崎1丁目地内の埋蔵文化財の有無について、福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財第1課に照会文書が提出された（事前審査番号22-2-313）。当該地は、周知の埋蔵文化財包蔵地である箱崎遺跡に位置しており（分布地図番号34-2639・遺跡略号HKZ）、また、平成21年10月29日に別事業に付随して実施された試掘調査の結果、地表下65cmで中世の遺構が存在することが確認されていた。埋蔵文化財第1課は、この旨を申請者に回答し、その取り扱いについて協議を行った。その結果、申請地面積915㎡のうち、共同住宅建設にともなう基礎工事によって遺構の破壊が免れない359㎡について、平成22年に発掘調査、平成23年度に資料整理・報告書作成を行い、記録保存をはかることで合意した。

発掘調査は、福岡市教育委員会埋蔵文化財第2課が、平成22年9月27日から同年12月17日まで実施した（調査番号1026）。調査面積は271㎡におよび、検出された中世の集落遺構から、貿易陶磁器などを中心にコンテナ39箱分の遺物が出土した。

(2) 調査体制

調査を実施した平成22年度および整理報告を行った平成23年度の組織は以下の通りである。

調査主体：福岡市教育委員会

調査総括：埋蔵文化財第2課 課長 田中壽夫

調査第1係長 米倉秀紀

調査庶務：埋蔵文化財第1課 管理係 古賀ともし

事前審査：埋蔵文化財第1課 事前審査係 木下博文

調査担当：埋蔵文化財第2課 調査係 松尾奈緒子

調査作業：阿部幸子 石川洋子 井上ヨシ子 上野照明 内野信代 大庭智子 小野山次吉

唐島榮子 許斐拓生 指原始子 武田調子 竹原良秋 田中ゆみ子 永田とみ子

中村桂子 濱地静子 林厚子 保坂由美子 北條こず江 増田ゆかり 村山巳代子

安元尚子 結城フヂコ

整理作業：鶴田靖子 松下伊都子 宮崎由美子 吉盛 泉 渡辺宏代 (五十音順・敬称略)

現地での発掘調査にあたっては調査委託者をはじめとして、関係者のみなさま、地域のみなさまからご理解をいただくとともに、多大なご協力を賜りました。ここに記して謝意を表します。

第2章 遺跡の立地と地理的・歴史的環境

箱崎遺跡は、博多湾岸一帯に带状に広がる、箱崎砂層とよばれる古砂丘の北端部に立地する。箱崎砂層は、旧河道や鞍部により画された小砂丘群から構成されており、これらの小砂丘上には、吉塚本町遺跡、堅粕遺跡、博多遺跡群、西新町遺跡、藤崎遺跡、姪浜遺跡などの遺跡が展開している。箱崎砂層は地質学的に縄文時代晩期までに形成されたことが明らかとなっており、これまでの発掘調査から、新砂丘が海側に形成されて砂丘の環境が安定するのを待ってから、人々が砂丘上に進出し集落を営んだことが確認されている。

箱崎遺跡が展開する砂丘は、東西を宇美川と博多湾に画されている。西側では博多湾にむかう緩斜面がひろがり、東側は博多湾に注ぎこむ宇美川による開析をうけて崖面となっていたようである。

箱崎遺跡が立地する古砂丘に人々が本格的に進出するのは、古墳時代初頭以降である。集落は古墳時代を通じて砂丘の東側斜面を中心に展開するが、7世紀～9世紀の遺構・遺物はまばらであり、博多遺跡群などとは異なる在り方を示している。10世紀前半に、宮崎八幡宮が穂波郡大分宮から遷宮され、砂丘最高所に創建された後は、宇美川河口に形成されていた潟湖を利用した「箱崎津」において日宋貿易が行われ、箱崎遺跡は最盛期を迎える。宮崎宮創建当初は、宮南東の緩斜面を中心に砂丘東側に遺構が展開するが、12世紀中頃になると砂丘西側斜面へ集落が拡大し、これ以降14世紀初頭までは砂丘全面に遺構が確認されており、多量の貿易陶磁が出土する。このような最盛期の様相は、箱崎が博多とならぶ国際貿易都市として繁栄していたことを記録する文献史料とも合致している。

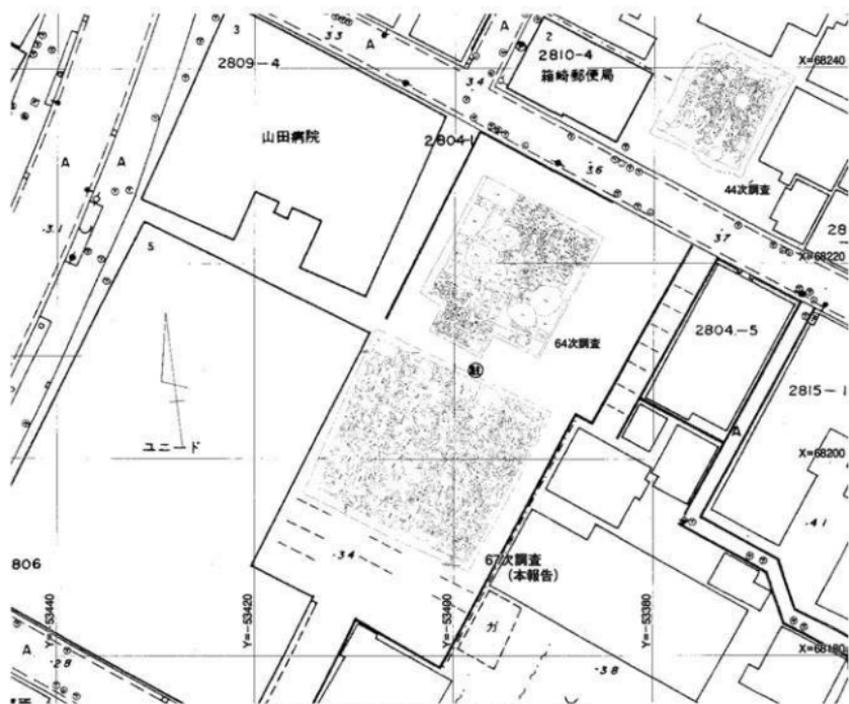
1274年に発生した文永の役では、13世紀後半の焼土層が検出される調査地点が多く、箱崎一帯が焼失した可能性が高いと考えられている。しかし、韓国新安沈没船から出土した「宮崎宮」銘木簡からは、箱崎がすくなくとも14世紀前半までは貿易都市として存続していたことが確認されている。



第1図 箱崎遺跡周辺遺跡分布図 (S=1/50,000)



第2図 周辺調査地点 (S=1/5,000)



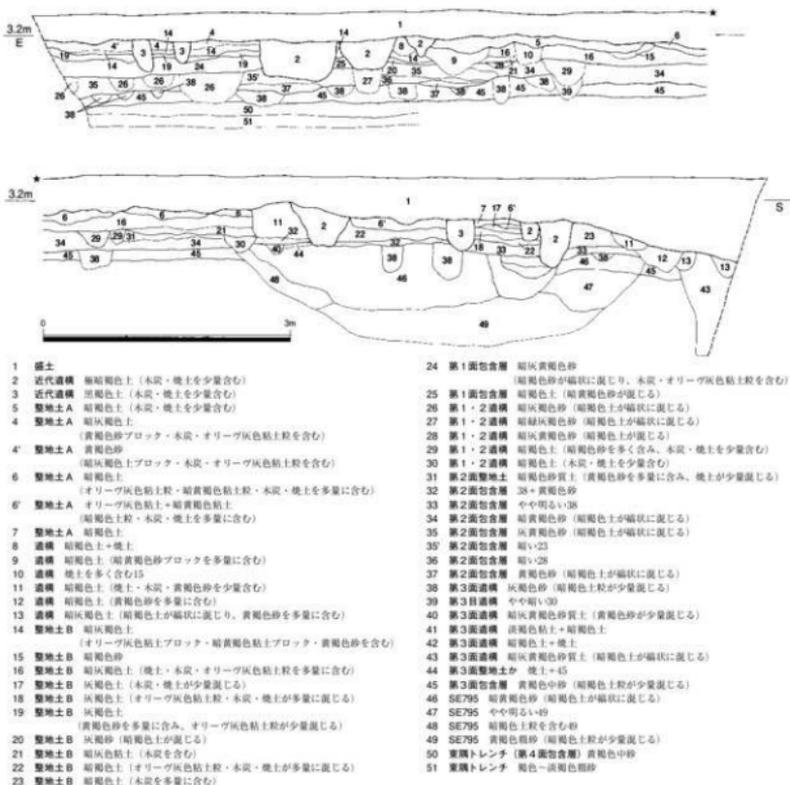
第3図 第67次調査区位置図 (S=1/500)

第3章 発掘調査の記録

(1) 調査の概要

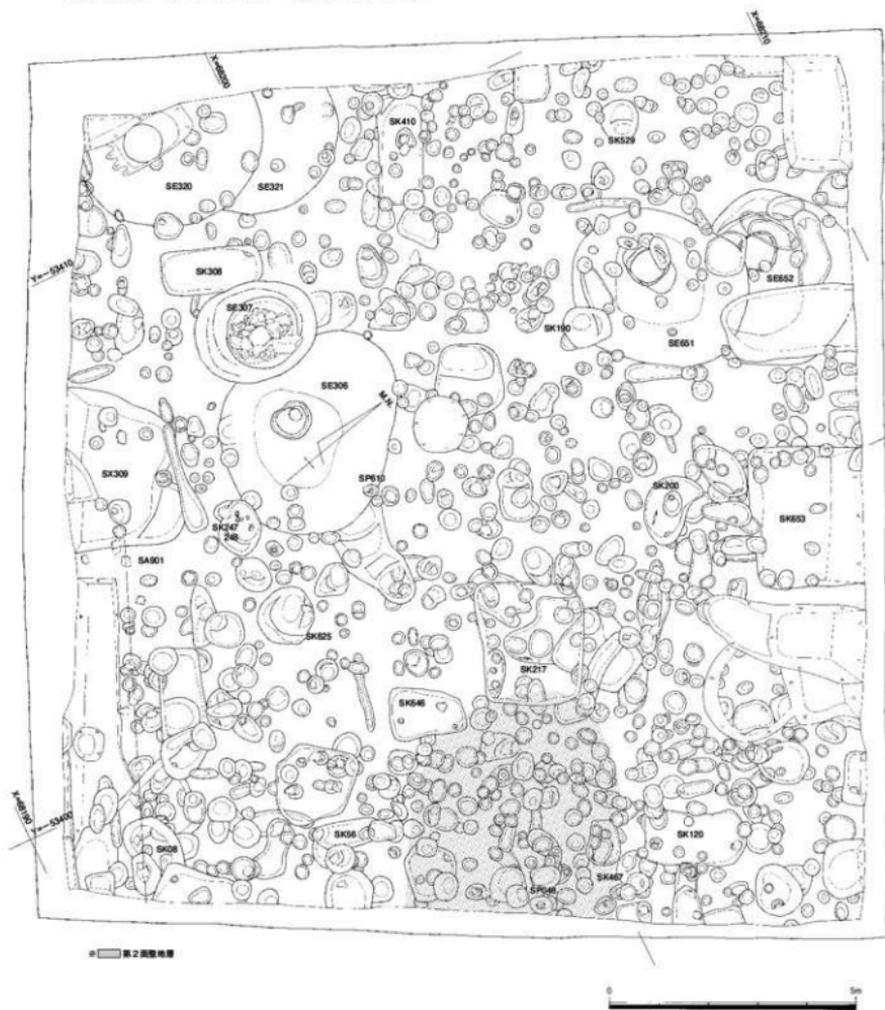
本調査区は、砂丘の西側斜面、宮崎宮の北西部に位置している(第1・2図)。これまでの調査成果から、集落が砂丘西側斜面へ拡大する12世紀中頃から14世紀前半までの遺構の検出が予想された。

調査は2010年9月27日より着手し、第4図に示した整地土A・B(土層5~7・14~23)を重機によって除去して検出した暗灰黄褐色砂を第1面と設定した。整地土A~整地土Bの時期は14世紀前半以降の遺物が少なく不明である。その後、北東側に隣接する64次調査地点の成果をふまえ(第3図)、調査区内各所に設けた先行トレンチ(第38図)で土層を検討しながら合計4面の遺構面を設定し、ベルトコンベアを使用して排土を場内処理しながら調査をすすめた。第4面全景撮影後、下層の遺構の有無を確認するトレンチ調査や遺物の洗浄作業を行ってから、重機により調査区を埋め戻し、2010年12月17日に調査を完了した。



第4図 調査区南東壁土層実測図 (S=1/60)

第1・2面ではほぼ同じ時期の13世紀中頃～14世紀前半の遺構が検出された(第5図)。第1面包含層(第4図土層24・25)は、調査区中央部から西側では確認されず、調査区の北東壁から南東壁に沿って帯状に遺存していた(図版1-1)。第2面は、調査区中央部から西側では整地土Bの除去後に検出された黄褐色砂上面とし(第4図土層31～37)、調査区北東部から南東部では第1面包含層を掘り下げて検出した。第2面において最も多くの遺構が確認され、調査区南東部では、焼土粒を含む整地層も確認された(第4図土層31・第5図網掛部分)。



第5図 第1面・第2面遺構配置図 (S=1/100)

第3面は、第2面包含層を掘り下げて検出した黄褐色砂上面とし（第4図土層44・45）、12世紀末～13世紀代の柱穴・土坑を中心とする遺構が検出された（第6図）。最終面の第4面は、第3面包含層を除去した黄褐色～黄白色砂上面とした。第4面は、調査区北側を最高所として調査区中央から南へむかって低く傾斜する。その比高差は約0.5mをはかる。遺構の密度は非常にうすく、ほとんどが標高の高い北側に集中するが、出土遺物が少ないため遺構の時期はわからない（第6図）。遺構として記録を作成したが、その多くが生痕である可能性もある。第3面包含層の時期が12世紀後半と考えられることから、第4面で検出した遺構は少なくともそれ以前となる。



第6図 第3面・第4面遺構配置図 (S=1/100)

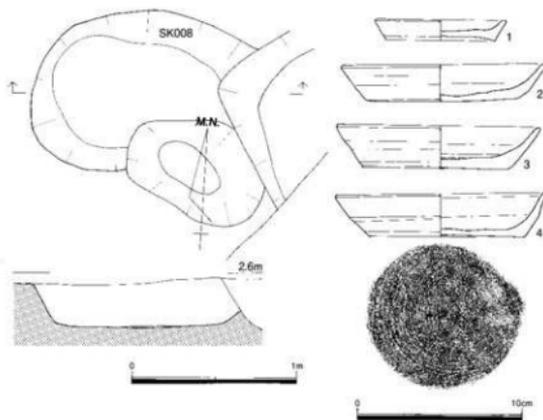
(2) 第1面・第2面の遺構と遺物

前項で述べたように、第1面と第2面ではほぼ同じ13世紀中頃～14世紀前半の遺構を検出したため、ここではまとめて報告する。遺構面の時期差を明確に捉えられなかったのは、本来第1面で検出すべき遺構を第2面で検出したことに起因すると考えられる。

① 土坑

SK008 (第7図)

第1面の調査区南隅で検出した不整形の土坑である。標高2.6m前後で検出し、南側と東側を別の遺構にきられる。主軸をほぼ東西にとり、長軸約1.5m、短軸約1mの不整形円形を呈する。検出面からの深さは0.3mをはかる。埋土は暗褐色砂質土を主体とし、木炭・焼土粒・灰色砂を多く含む。出土遺物から、13世紀後半～14世紀前半の遺構と考えられる。



第7図 SK008実測図 (S=1/30)・出土遺物実測図 (S=1/3)

[出土遺物 (第7図)]

土師器・陶器・時期・瓦器・瓦質土器などが出土した。このうち、土坑の西端で集中して出土した土師器小皿(第7図1)、土師器杯(第7図2～4)を図示している。すべて糸切りにより底部が切り離されており、板の圧痕などはみられない。4は、底部内面と底部外面の対応する部分に指紋が残る。

SK190 (第8図)

第1面の調査区北隅で検出した不整形円形の土坑である。標高2.5m前後で検出した当初は、第8図に示した点線の部分を遺構の範囲と考えていたが、第1面包含層を掘り下げて第2面の遺構検出を行った際に遺構の範囲が北側に広がることが分かった。最終的な遺構の規模は、長軸約1m、短軸0.85m、検出面からの深さは0.65mをはかる。埋土は、木炭・焼土粒を多く含む暗褐色砂質土である。

[出土遺物 (第8図)]

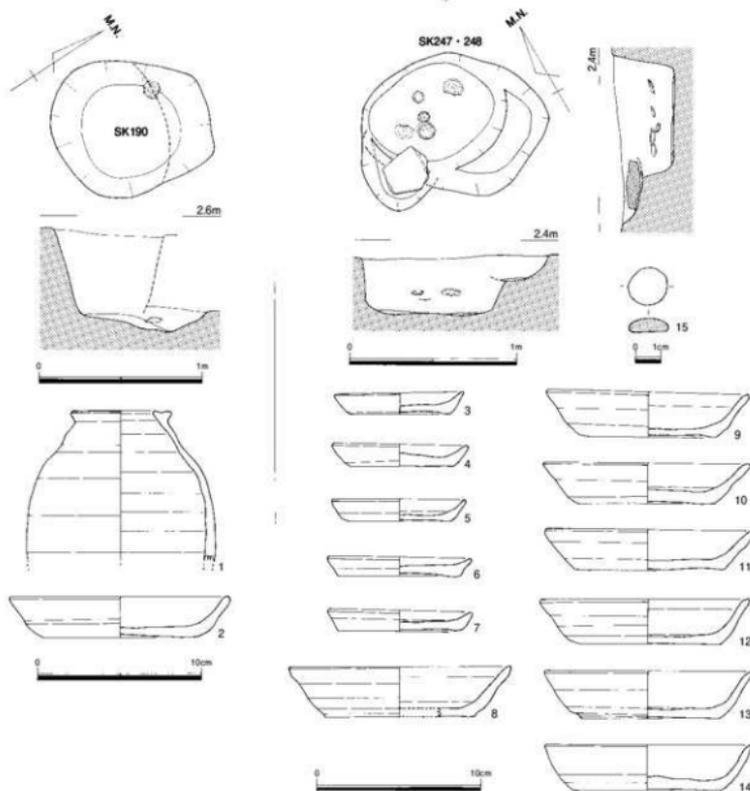
1・2ともに破片である。1は輸入陶器壺で、内外面に薄く灰白色の釉が施される。2は土師器杯で、口縁端部の一部に灯明皿として使用した痕跡がのこる。13世紀代の所産である。

SK247・248 (第8図・図版3-4)

第2面の調査区西側で検出した、長軸約1.1m、短軸0.7m、深さ0.3mをはかる不整形円形の土坑である。検出面の標高は2.3mをはかる。埋土は、黄褐色砂と木炭を含む暗褐色砂質土を基本とする。西隅を別の遺構にきられる。当初、SK247として遺物をとりあげたが、その後掘りきっていないことがわかり再度掘削を行い、このときの出土遺物をSK248としてとりあげた。最終的にSK247とSK248は同一遺構と判断し、報告する。出土遺物から13世紀後半～14世紀初頭の遺構と考えられる。

[出土遺物 (第8図)]

3～7は土師器小皿、8～14は土師器坏である。底部はすべて糸による切り離しが行われ、7・8・11・13以外に板圧痕が残る。15は蛇紋岩製の基石あるいはおはじきである。重量は28gをはかる。



第8図 SK190・247・248実測図 (S=1/30)・出土遺物実測図 (S=1/2・1/3)

SK467 (第9図・図版3-5)

第2面の調査区南東部で検出した土坑で、東側を別の遺構にきられる。検出面の標高は27mをはかる。直径0.8m、深さ0.35mをはかる不整形の土坑に、直径0.35m、深さ0.15m～0.2mの円形柱穴が加わったような形をなす。埋土は暗褐色砂質土を主体とし、木炭・焼土粒を多く含む。

[出土遺物 (第9図)]

1・2は土師器小皿で、底部に回転糸切りと板の圧痕がのこる。13世紀代の所産である。3は青白磁合子、4は瓦器碗である。

SK529 (第9図)

第2面の調査区北隅で検出した不整楕円形の土坑である。検出面の標高は2.4m、土坑の規模は長軸約1m、短軸約0.7m、深さ0.4mをはかる。埋土は暗褐色土を基本とする。

【出土遺物(第9図)】

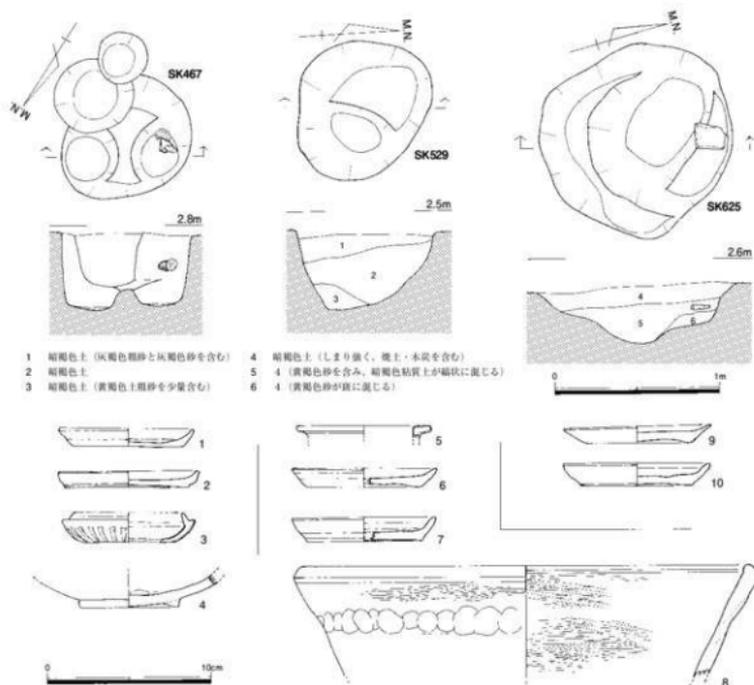
5～8の遺物を図化しただが、すべて破片である。5は青白磁香炉で、口縁端部上面に沈線がめぐる。6・7は土師器小皿で、底部に回転糸切りと板の圧痕がのこる。13世紀代の所産である。8は須恵質土器こね鉢である。外面は黒灰色、内面は褐色をおびた灰色を呈する。

SK625 (第9図)

第2面の調査区南東部で検出した土坑で、直径1.1m～1.2mの不整円形を呈する。検出面の標高は2.4mをはかる。底面は最も深い中央部にむかって階段状をなし、深いところで検出面から約0.3m残存する。埋土は暗褐色土を基本とする。出土遺物から13世紀前半の遺構と考えられる。

【出土遺物(第9図)】

9・10は土師器小皿である。内底面は一定方向にナデ調整され、外底面には回転糸切りと板の圧痕が残る。



第9図 SK467・529・625実測図 (S=1/30)・出土遺物実測図 (S=1/3)

② そのほかの土坑

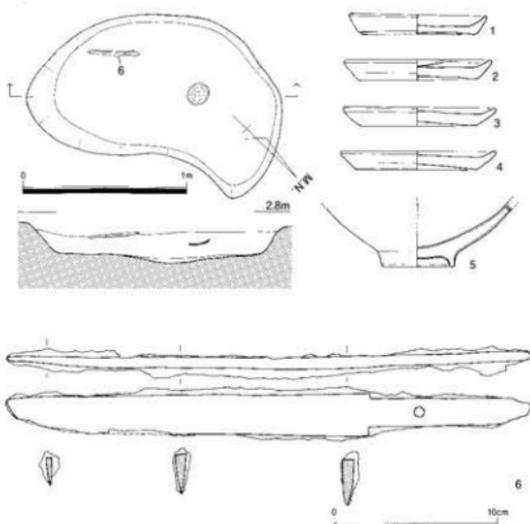
SK200 (第10図・図版3-6)

第1面の調査区北東部に検出した、南北に長軸をもつ不整形円形の土坑である。検出面の標高は、2.7mをはかる。長軸は約1.4m、短軸は約1mをはかり、検出面から0.2m程度残存する。埋土は、木炭・焼土粒を含む黒褐色砂質土と灰褐色砂質土の上下2層に分できた。図示した遺物はすべて上層の黒褐色砂質土から出土した。

出土遺物から13世紀中頃～14世紀初頭の遺構と考えられる。

〔出土遺物 (第10図)〕

1～4は土師器小皿で、すべて回転系切りによって底部が切り離されている。1をのぞき、板の圧痕も観察できる。内底面には一定方向のナデ調整が施される。5は龍泉窯系青磁碗Ⅲ類で、内外面ともに無文である。6は、全長31.5cm、刃部21.8cmをはかる鉄刀である。メタル反応はあるものの錆が顕著で、正確な断面形等は不明である。茎に直径0.6cmの目釘穴が穿たれているが、柄などの痕跡は観察されなかった。



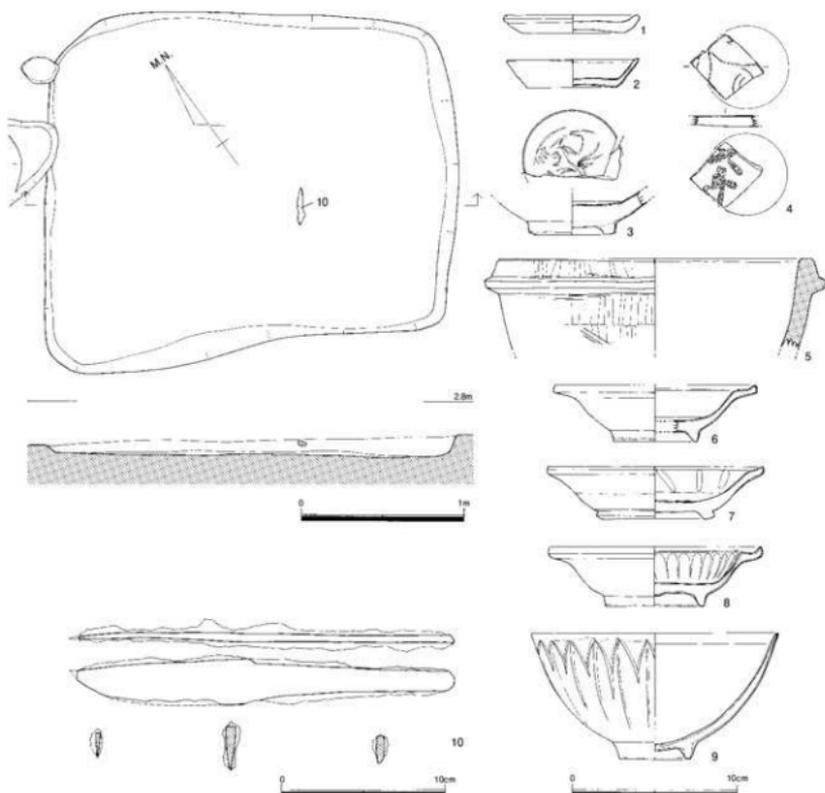
第10図 SK200実測図 (S=1/30)・出土遺物実測図 (S=1/3)

SK217 (第11図・図版3-7)

第1面の調査区東部に検出した浅い隅丸長方形の土坑である。第1面包含層がかろうじて残存する斜面において検出された。長軸約2.4m、短軸2.0m～2.2mをはかる。検出面の標高は2.5m～2.6mで、検出面からは0.10m～0.15m程度残存していた。埋土は、暗褐色土を主体とし、暗緑色粘土粒・木炭・焼土を含む。出土遺物から13世紀中頃～14世紀前半の遺構と考えられる。

〔出土遺物 (第11図)〕

1は土師器小皿で、底部は回転系切りで切り離される。13世紀後半～14世紀初頭の所産である。2は白磁の口先げ皿Ⅹ類である。外底面には軸葉を板状工具でのぼした痕跡がのこる。3は龍泉窯系青磁碗Ⅱ類である。暗緑色の釉が薄くかけられている。4は白磁皿の底部か。被熱して釉が発泡している。露胎となっている外底面に「大郎」あるいは「六郎」と墨書される。5は滑石裂石鍋である。赤味を帯びた灰白色を呈する。6・8は龍泉窯系青磁坏Ⅲ類である。ともに青緑乳色の釉が厚く全面施釉される。8は内面を凹面に削り花卉型としている。7は8を模倣とした白磁坏である。釉色は青味がかった灰白色を呈する。内底面の釉は輪剥ぎされ、内面は8の花卉型をまねるようにならぬに釉がはぎ取られている。9は龍泉窯系青磁碗Ⅲ類である。10は残存長22.8cm、刃部11.4cmをはかる鉄刀子である。鋒側には、刃部と柄の境界部分に段がつくりだされている。メタル反応はあるものの、錆が顕著で正確な断面形等は不明である。



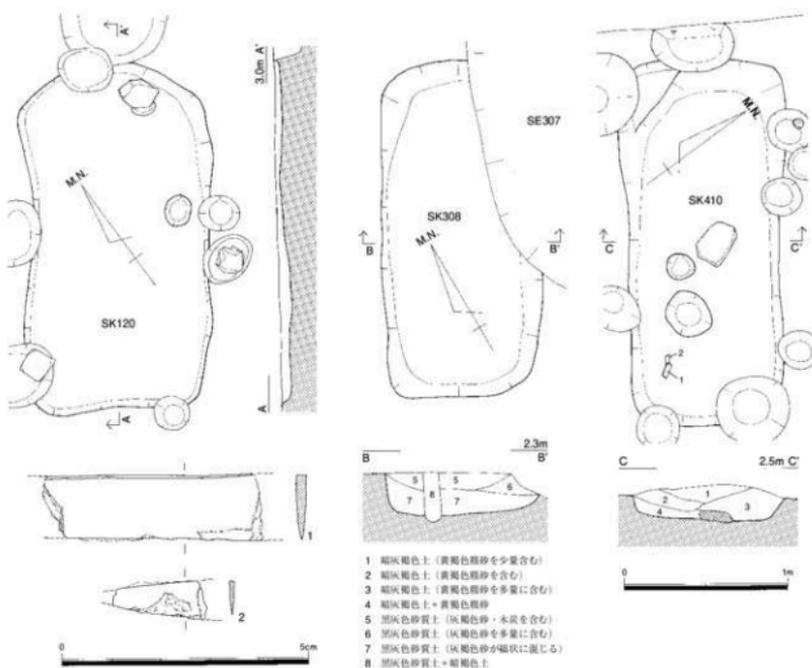
第11図 SK217実測図 (S=1/30)・出土遺物実測図 (S=1/3)

SK120 (第12図)

第1面の調査区東部で検出した、隅丸長方形のプランをなす土坑で、SK217の東側に位置する。各辺は小規模な別の遺構にきられる。長軸は約2.1m、短軸は1.1mをはかり、検出面の標高は約2.95mで、検出面から0.10m程度残存していた。埋土は、暗緑色粘土粒・木炭・焼土を多く含む暗褐色土である。北東辺において2つの石が検出された。土師器・須恵器・瓦器・陶磁器等が出土したが、いずれも細片のため図化し得ない。平面形や規模等から墓である可能性も考えられる。

SK308 (第12図)

第2面の調査区西部で検出した隅丸長方形の土坑で、北東隅をSE307にきられる。長軸は約2.1m、短軸は約1mをはかり、検出面の標高は2.15m、検出面から0.25m程度残存していた。埋土は、黒灰色土を主体とし、灰褐色砂を多く含む。木棺痕跡等は確認できなかったが、平面形や規模等から墓である可能性もある。陶磁器・土師器・須恵質土器等の細片のほか、鉄釘が出土しているが、出土位置から木棺にともなうものとは考えにくい。



第12図 SK120・308・410実測図 (S=1/30)・SK410出土遺物実測図 (S=1/2)

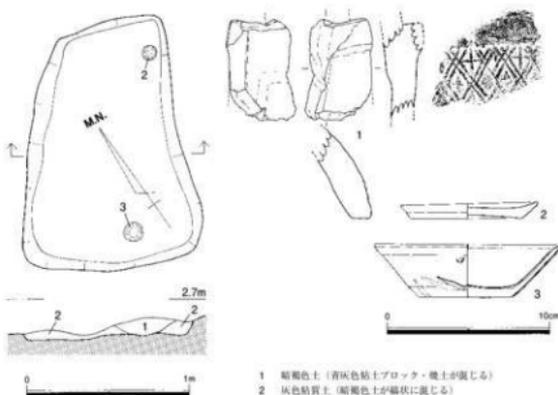
SK410 (第12図)

第2面の調査区北西部で検出した、隅丸長方形のプランをなす土坑で、SE321の北東側に位置する。

長軸は約2.2m、短軸は0.9mをはかり、検出面の標高は約2.35mで、検出面から0.2m程度残存していた。埋土は、暗灰褐色土を主体とし黄褐色粗砂を少量含む。中央部に石が、南東隅に鉄製品 (図12-1・2) が検出された。平面形や規模等から墓である可能性もある。

[出土遺物 (第11図)]

1・2ともに鉄製刀子の一部で、刃部幅はそれぞれ2.5cm、1.5cmをはかる。2は1よりも小型品。



第13図 SK646実測図 (S=1/30)・出土遺物実測図 (S=1/3)

SK646 (第13図)

第2面の調査区南東部で検出した土坑である。長軸は約1.5m、短軸は北東辺では0.65m、南西辺では1.2mをはかり、北東-南西方向に主軸をもつ隅丸台形のようなプランをなす。検出面の標高は約2.6mで、検出面から0.10m程度残存していた。埋土は、暗褐色土～灰色粘質土である。木棺痕跡等は確認されなかった。出土遺物から、13世紀後半～14世紀前半の遺構と考えられる。

[出土遺物 (第13図)]

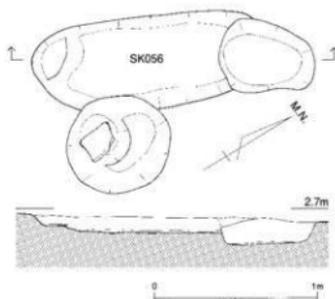
1は玉縁の部分を含む丸瓦片である。凸面には「十」文様が刻まれた二重斜格子のタタキがのこる。2は北東隅から出土した土師器小皿である。底部は糸切り調整される。3は南西隅から出土した口先の白磁小皿Ⅹ類で、外面には軸を板状工具でのばした際の痕跡がのこり、粗雑な印象をうける。

SK056 (第14図)

第1面の調査区南隅で検出した土坑である。南東辺と北東端を別の遺構にきられる。長軸は約1.4m、短軸は0.55mをはかり、北東-南西方向に主軸をもつ溝状の楕円形プランをなす。検出面の標高は2.6m～2.65mで、検出面から0.10m程度残存していた。埋土は、焼土粒・木炭・灰色砂を多く含む黒褐色砂質土である。

[出土遺物 (図版6-1・2)]

遺構の南西端から鉄滓25点が集中して出土した。総重量は1590gをはかる。うち5点は碗形滓で、大型と小型のものがある。のこりの良い2点を図版に示した(図版6-1・2)。鉄滓の多くは遺構検出時に出土しており、SK056にともなうものではなく、第1面包含層の上面に堆積する整地土Bに含まれていたものである可能性が高い。このほかに土師器・瓦器・陶磁器等が出土したが、いずれも細片のため図化し得ない。



第14図 SK056実測図 (S=1/30)

SP610 (第15図・図版5-4)

第2面で検出したSE306の東屑で検出した円形の小穴である。検出面の標高は2.2m、直径は0.35mをはかり、検出面から深さ0.15m程度残存していた。埋土は第3面包含層に近似しており、SE306を掘削してから遺構の存在に気がついた。したがってSE306との先後関係は不明である。

[出土遺物 (p.38)]

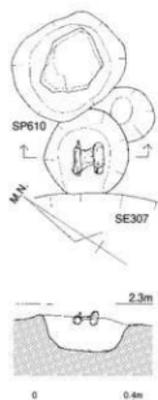
ウマの上顎歯が9点出土した。詳細については付編を参考にされたい。

SP048 (第16図)

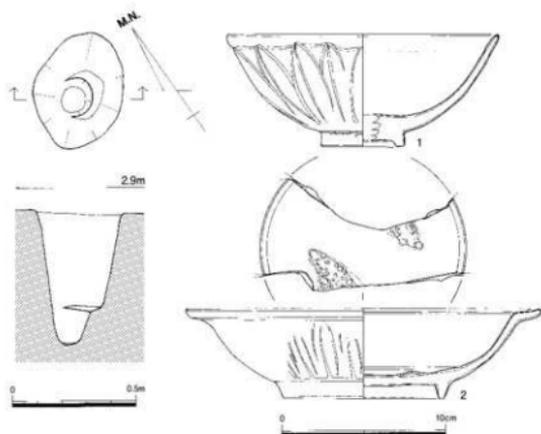
第1面の調査区東部で検出した、北東-南西方向に主軸をもつ楕円形の小穴である。検出面の標高は2.8mで、長軸は0.5m、短軸は0.35mをはかる。検出面から深さ0.4m程度のところで段を形成し、さらにそこから0.15m程度で底となる。埋土は、暗褐色砂質土を主体とし、木炭・焼土粒・灰色砂を多く含む。

[出土遺物 (第16図・図版6-4・5)]

1は龍泉窯系青磁碗Ⅱ類である。軸は青緑乳色で比較的厚い。2は龍泉窯系青磁坏Ⅲ類で、内面見



第15図 SP610実測図 (S=1/20)

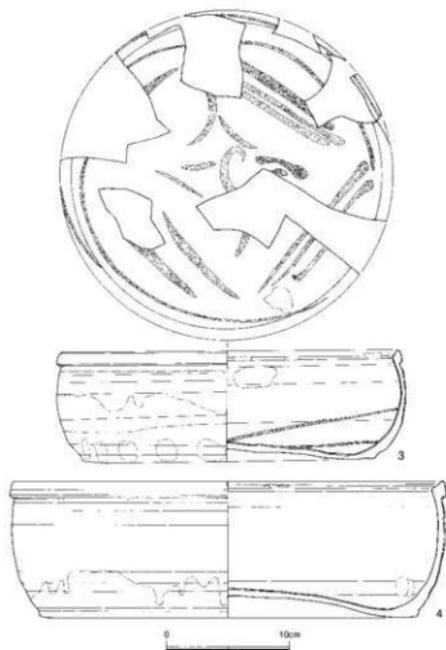


込みに双魚文を貼り付けて装飾している。釉は濃い暗緑色。3は中国陶器盤である(図版6-4・5)。内面は鉄絵で装飾され、オリブがかかった黄釉がほどこされる。外面底部付近には重ね焼きの痕跡がのこる。4は中国陶器盤である。無文で暗い黄色の釉がほどこされる。

SK653 (第17図・図版5-1~3)

第2面の調査区北東辺中央に位置する隅丸方形の土坑である。標高2.5mで検出し、北東辺は調査区外へと続く。長辺は2.9m、短辺は2m以上をはかり、検出面から0.5m程度残存する。北西辺と南東辺に直径約0.3m、深さ約0.4mをはかる柱穴を検出した。博多遺跡群や箱崎遺跡に分布し、貯蔵施設と推定されている遺構であろう。埋土は、暗灰褐色土~暗黄褐色砂を基本とする。遺構下層には焼土層が堆積しており(土色3・3'・20)、この方形土坑は、焼失により廃絶された可能性が考えられる。出土遺物から13世紀後半~14世紀初頭の遺構と考えられる。

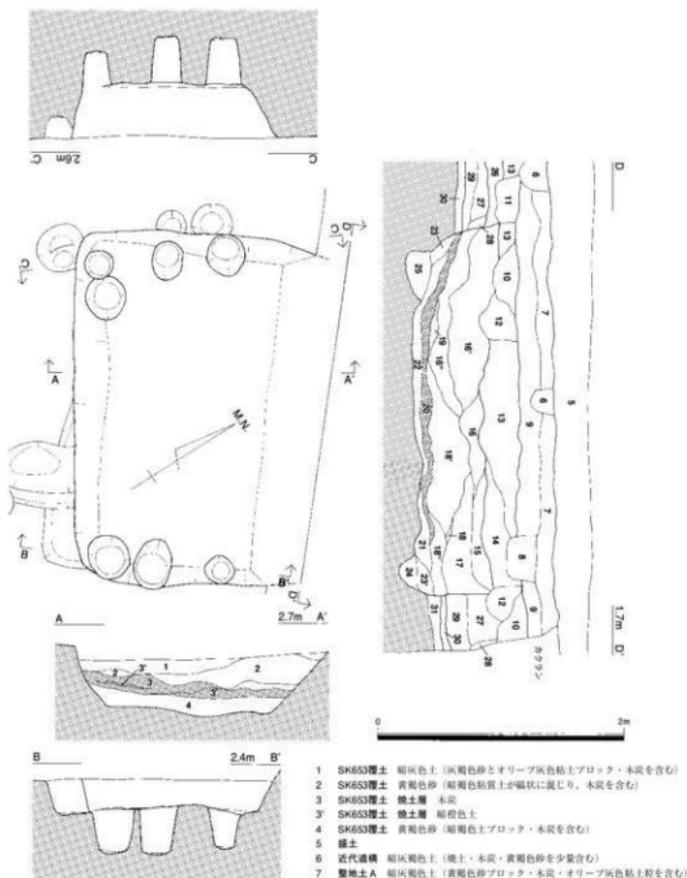
[出土遺物(第18図・図版6-7)]



1・2・12は中国陶器壺、3は中国陶器坏である。2は暗褐色のうすい釉の上から黄白色の釉がほどこされる。4は龍泉窯系青磁小碗Ⅲ類、5は龍泉窯系青磁碗Ⅱ類で、釉色はそれぞれ青緑乳色、緑乳色。6・8は土鍋で、7は石英製の碁石またはおはじきか。重量は11.1gをはかる。9は青磁小壺蓋である。

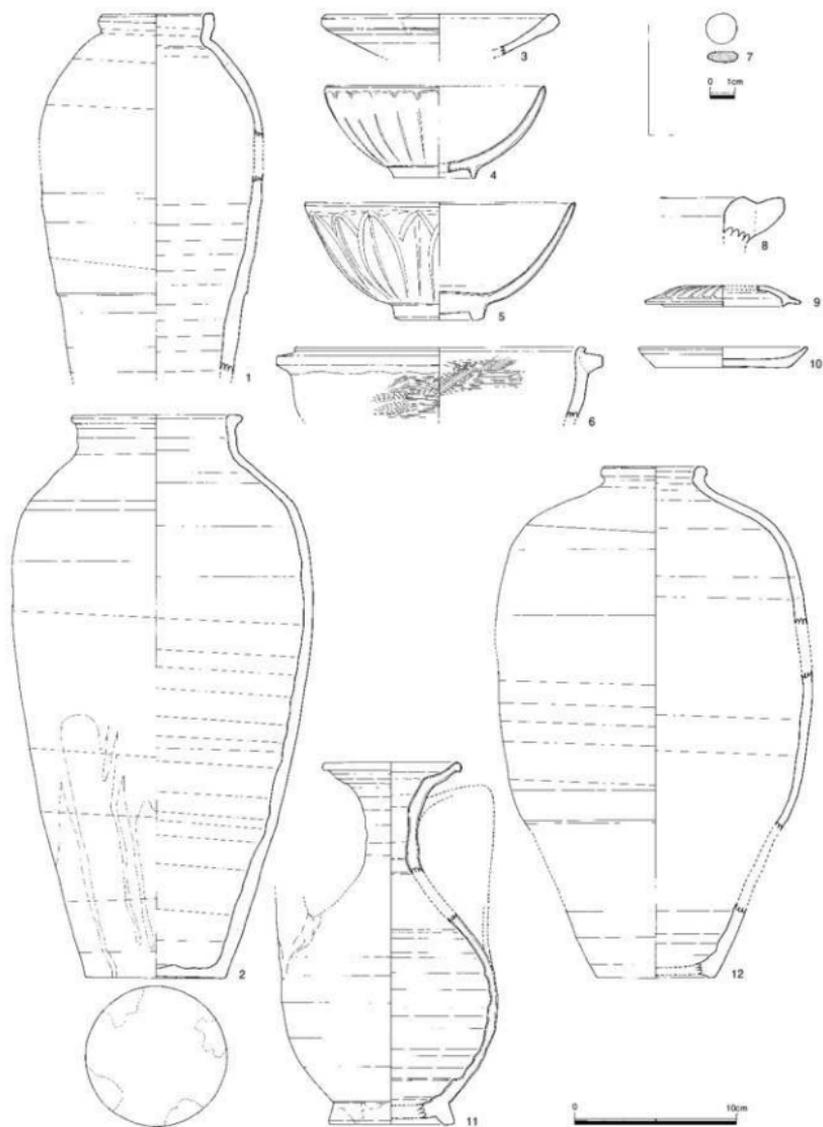
第16図 SP084実測図(S=1/20)・出土遺物実測図(S=1/3・1/4)

白い化粧土の上に淡明緑色の釉が施釉される。10は土師器小皿。11は白磁水注で、淡いオリブがかかった灰白色の釉をあつくかける優品である(図版6-7)。



- 9 塋地土B 縮灰褐色土（オリブ灰色粘土ブロック・黄褐色粘土ブロック・黄褐色砂が混じる）
- 10 第1面遺構 縮灰褐色土（本炭を含む）
- 11 第1面遺構 縮褐色土（砂を多く含む。本炭・焼土を少量含む）
- 12 第1面遺構 縮黄褐色砂（オリブ灰色粘土粒を含む）
- 13 第1面包含層 縮灰黄褐色砂（縮褐色砂が層状に混じり、本炭・オリブ灰色粘土粒を含む）
- 14 第1面包含層 明い-13
- 15 SK653層土 縮灰褐色土（黄褐色砂を含む）
- 16 SK653層土 縮灰黄褐色砂（縮褐色土粒・灰褐色粗砂を含む）
- 16' SK653層土 16（本炭を多く含む）
- 16'' SK653層土 明い-16
- 17 SK653層土 黒色土（本炭・砂礫を多量に含む）
- 18 SK653層土 縮黄褐色砂（粗砂と黒色土粒を含む）
- 18' SK653層土 本炭を含む18
- 18'' SK653層土 明い-18
- 19 SK653層土 焼土を含む16
- 20 SK653層土 焼土層 淡赤色砂+本炭塊+焼土塊
- 21 SK653層土 黄褐色粗砂（焼土粒を含む）
- 22 SK653層土 灰褐色粘質土+灰褐色粗砂
- 23 SK653層土 灰褐色砂
- 24 SK653層土 粗砂を多く含む23
- 25 SK653層土 縮灰褐色砂（縮褐色土粒を少量含む）
- 26 第2面包含層 灰褐色粘質土+黄褐色砂（本炭を含む）
- 27 SK653層土 縮黄褐色砂（灰褐色砂を含む）
- 28 第3面包含層 縮黄褐色砂（縮褐色土が層状に混じる）
- 29 第3面包含層 縮灰褐色砂質土（本炭・焼土粒を含む）
- 30 第3面包含層 黄褐色中砂（縮褐色土が層状に混じる）
- 31 第4面包含層か 黒色土（黄褐色砂、本炭を含む）
- 31' 赤褐色粗砂
- ※ 焼土層を示す（土色3・7・20）

第17図 SK653実測図 (S=1/40)



第18図 SK653出土遺物実測図 (S=1/2・1/3)

③ 井戸

SE306

(第19図・図版4-1・2)

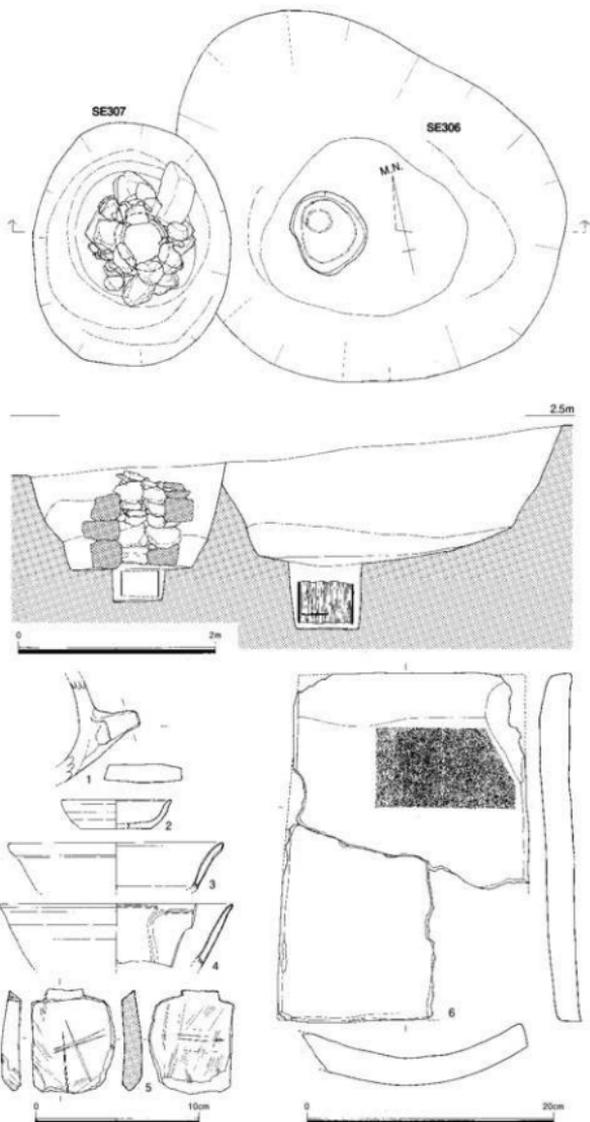
調査区南部に位置する井戸である。検出面から約0.5m掘り下げてから、SE307より古い井戸であることが判明した。堀方は直径3.7m～4.0mの不整形円形プランをなす。検出面から約1.7mの深さで、直径約1.9mの不整形円形の平坦面を形成し、そこからさらに一段深く、直径約0.8mの円形に0.8m程度掘り下げて、集水部としていた。集水部を0.2mほど掘り下げたところで、井筒としていた直径0.6mほどの不整形円形の木桶が検出された。また、集水部底から0.15m程度浮いた状態で円形の網のようなものが出土したが、遺存状況が悪くとりあげることはできなかった。

堀方埋土は、上層では黄褐色砂を多く含む暗褐色土であったが、下層では褐色土が糝状に混じる黄褐色砂となる。集水部の覆土は褐色粗砂を含む暗灰褐色粘質土であった。

出土遺物から14世紀代の遺構と考えられる。

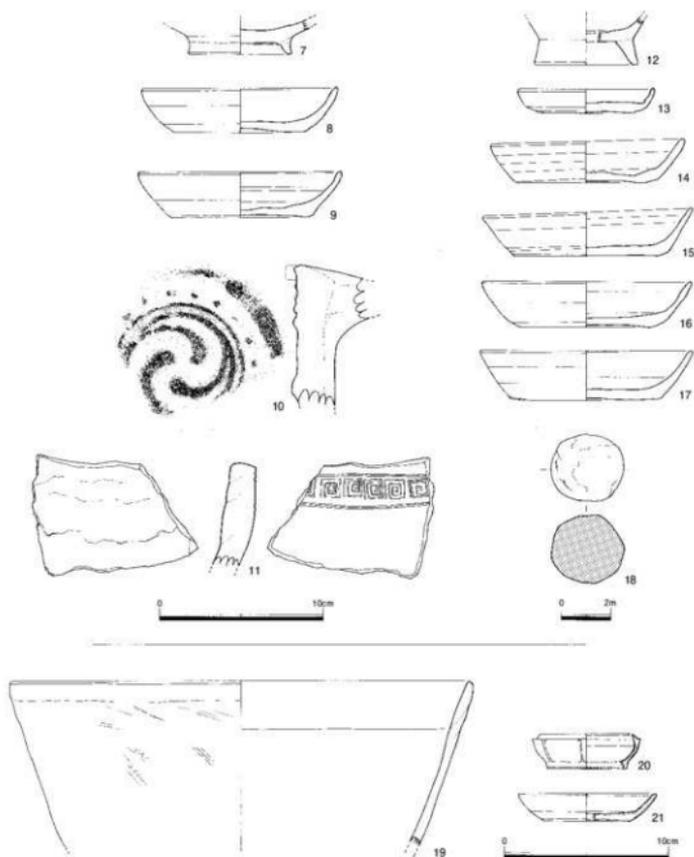
[出土遺物(第19・20図)]

1～6はSE307との検出面から出土した。1は把手付土鍋で、2は土師器小皿。内面底部は回転ナデのまま調整が加えられず、底部は糸切り調整される。口縁端部に燈明皿



第19図 SE306・307実測図 (S=1/50)・出土遺物実測図 (S=1/3・1/4)

は口縁端部に燈明皿



第20図 SE306・307出土遺物実測図 (S=1/2・1/3)

としての使用痕が残る。搬入品か。3は龍泉窯系青磁坏Ⅲ類で、4は龍泉窯系青磁坏Ⅰ類。5は滑石製石鍋口縁部の再加工品。6は凹面に模骨痕がのこる平瓦。

7～10・12～18は堀方、11は井筒内から出土した。7・12は高台がつく土師器碗。独特の器形から、搬入品あるいは宮崎宮に関係のある遺物の可能性がある。8・9・14～17は土師器坏で、底部は回転糸切りで切り離され、17以外は板の圧痕が残る。9をのぞいて内底面には定方向にナデ調整が加えられる。10は巴文軒丸瓦。11は土師質の奈良火鉢である。13は底部が糸切り調整される土師器小皿。18は表面に敲打痕ののこる礫石である。重量は27.1gをはかる。

SE307 (第19図・図版4-3・4)

SE306の西端を破壊してつくられた石組みの井戸である。堀方は南北2.5m、東西2mをはかる楕円形プランをなす。検出面から約1.5mの深さで直径約1.2mの円形の平坦面を形成し、そこからさらに一

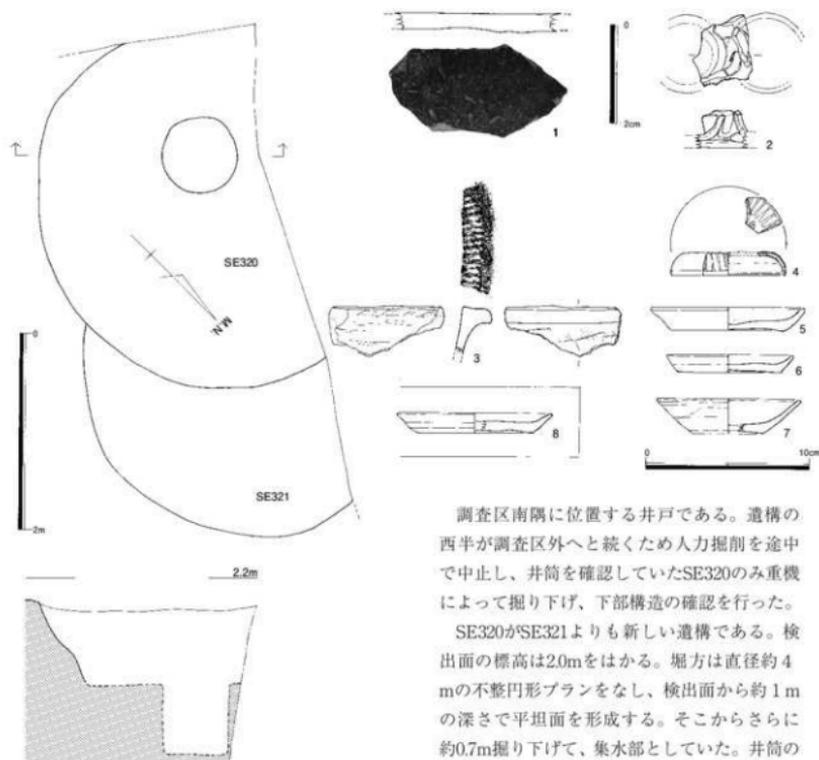
段深く、直径約0.5mの円形に0.3m程度掘り下げて、集水部としていた。集水部に据えられた井筒はその痕跡から直径0.35m程度の曲物と考えられる。石組みの井筒は、検出面から0.5m程度掘削したところで検出し、集水部の上面まで高さ約0.8m残存していた。掘方の埋土は、暗黄色砂を含む暗褐色砂質土で、井筒の埋土は黒灰色砂質土である。集水部の壁面側の土には、曲物を据える際に裏込されたとおもわれる、拳大の礫が多く含まれていた。

SE306との先後関係から、遺構の時期は14世紀以降であると考えられる。

【出土遺物 (第20図)】

19~21のすべてがSE307堀方から出土したものである。19は土鍋で、外面にススが厚く付着している。20は白磁合子である。体部は輪花によって6つに分けられ、灰乳色の釉がほどこされる。21は口禿げの白磁皿X類である。

SE320・321 (第21図・図版4-5)



第21図 SE320・321実測図 (S=1/50)
出土遺物実測図 (S=1/2・1/3)

調査区南隅に位置する井戸である。遺構の西半が調査区外へと続くため人力掘削を途中で中止し、井筒を確認していたSE320のみ重機によって掘り下げて、下部構造の確認を行った。

SE320がSE321よりも新しい遺構である。検出面の標高は2.0mをはかる。掘方は直径約4mの不整形円形プランをなし、検出面から約1mの深さで平坦面を形成する。そこからさらに約0.7m掘り下げて、集水部としていた。井筒の痕跡は検出面から確認され、掘方平坦面において木桶が検出された。

掘方埋土は黄褐色砂と暗褐色砂の互層、井筒埋土は黄褐色砂を含む暗褐色砂質土である。

[出土遺物 (第21図・図版6-8)]

1～5はSE321掘方、6・7はSE321井筒、8はSE320掘方から出土した。

1は瓦質土器片である。外面に初圧痕が多数観察できる。2は青白磁合子で、明るい青乳色の釉が厚くほどこされた優品である(図版6-8)。身の内部に小さい坯を3つ配置し、周囲を立体的な装飾でかざるタイプのもと思われる、類例としては戦島神社伝世品や松山市石手町塚出土品が挙げられる。3は土鍋で、外面にススが付着する。4は青白磁合子蓋。くすんだ青乳色の釉がほどこされる。5・6・8は土師器小皿で、底部は糸切り調整され、板の圧痕がのこる。7は青灰乳色の釉がかげられた口禿げの青磁皿である。体部下半は露胎。白磁皿Ⅹ類の模倣品とおもわれる。

SE651 (第22図・図版4-7・8)

第2面で検出された調査区北東部に位置する井戸である。掘方は直径3.1m～3.5mをはかる楕円形プランをなす。検出面から約1.3mの深さで直径約1.8mの不整形の平坦面を形成し、そこからさらに一段深く、直径約0.8mの円形に0.75m程度掘り下げて、集水部としていた。集水部には井筒として据えられた、直径約0.7mをはかる木桶が残存していた。井筒の痕跡は検出面から確認され、廃絶時に投棄されたと思われる石材が多く出土した。

掘方埋土は暗褐色土を含む暗黄褐色砂で、井筒埋土は黄褐色砂を含む暗灰褐色土。集水部に近づくにつれて粘性が増していった。

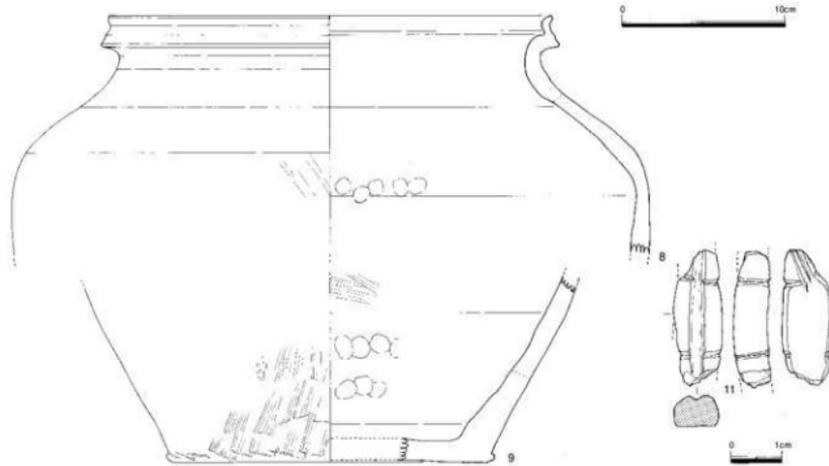
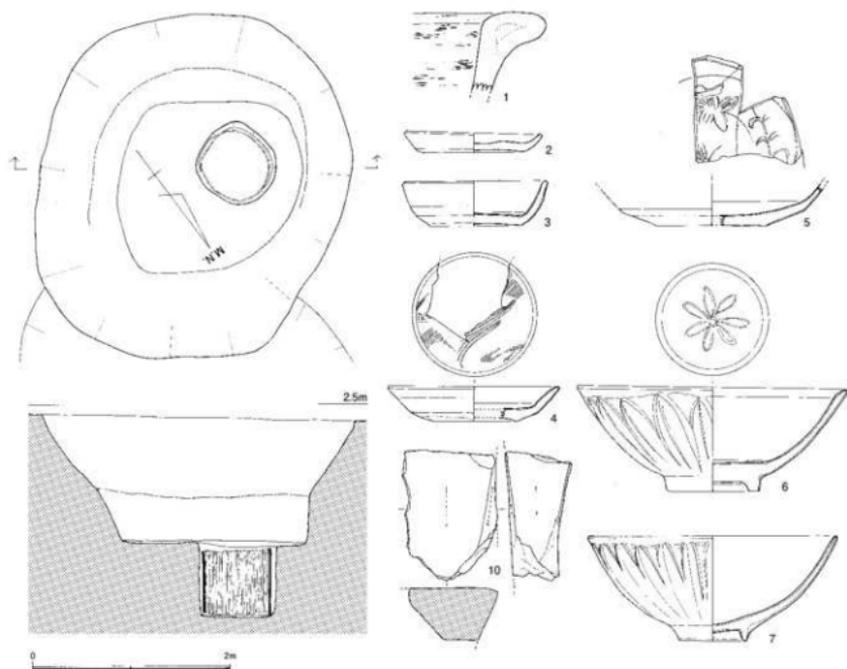
出土遺物から13世紀後半～14世紀前半の遺構であると考えられる。

[出土遺物 (第22・23図・図版6-3・6・9)]

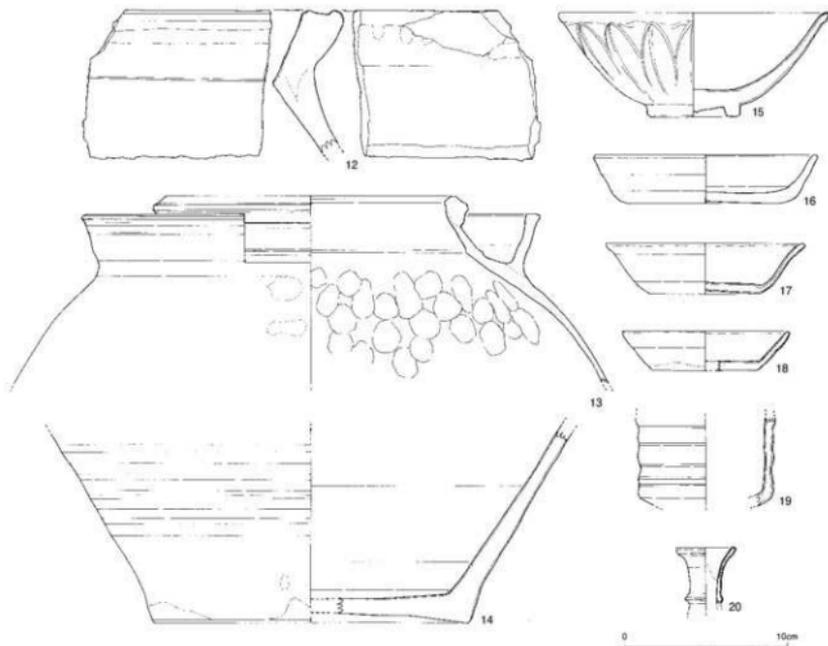
第22図1～11は掘方から、第23図12～20は井筒から出土した。

1は土鍋である。胎土は粗く、内外面にスス・コケが付着する。2は土師器小皿。2の底部は糸切りで切り離され、板の圧痕がのこる。3は口禿げの白磁皿Ⅹ類で、外底部は露胎。4は内面見込みに櫛歯文を有する同安窯系青磁皿Ⅰ類で、5は龍泉窯系青磁皿Ⅰ類。4・5は12世紀中頃～後半の所産である。6は見込みを文様で装飾する龍泉窯系青磁碗Ⅱ類で、暗緑乳色の釉がほどこされる。7は龍泉窯系青磁碗Ⅲ類で、釉色は青緑乳色。8・9は同一個体の国産陶器甕である(図版6-3)。形態は常滑窯系産に類似するが、暗褐色に発色した器表に暗緑色の自然釉がかかっているという特徴や胎土は備前窯系産に類似する。10は砂岩製砥石で、破損した後被熱している。重量は205.9gをはかる。11は滑石製錘で重量は23.6gをはかる。淡灰色の石材を用いている。

12は大型の中国陶器盤である。暗灰色に発色する化粧土の上から褐色の釉をハケ塗りする。外面屈曲部上半の一部は、帯状に釉を塗り残している。13は中国陶器甕である(図版6-6)。蓋受部をもつ器形は現代の中国南部でも使用されており、水をためて虫を防ぐ機能をもつという。内外面ともに暗赤褐色の釉がほどこされ、肩部外面には縦方向に耳の痕跡が残る。内面には顕著な指オサエの痕跡がみられる。14は中国陶器甕である。暗赤褐色に発色する胎土の上から、灰黄色の釉を内外面にほどこしている。15は龍泉窯系青磁碗Ⅱ類である。内外面とも被熱しており、暗青緑色の釉は艶を失っている。16は土師器杯。底部には糸切りと板の圧痕が残る。17・18は口禿げの白磁皿Ⅹ類である。17は底部にも板状工具によって釉が施され、18の底部は露胎である。19は龍泉窯系青磁香炉である。箱崎遺跡46次調査において出土している、三足の獣足と高台がつく器形のものである。本調査では、同じ器形のものかSP249からも出土している(図37-22)。被熱しており青緑乳色の釉にはつやがない。20は白磁製の仏具、軍持である(図版6-9)。乳色の釉が厚くほどこされる。



第22図 SE651実測図 (S=1/50)・出土遺物実測図 (S=1/2・1/3)



第23図 SE651出土遺物実測図 (S=1/3)

SE652 (第24図・図版4-6)

SE651に南端をきられ、北端は調査区外へつづく井戸である。堀方は長軸直径3.1m、短軸3m以上の楕円形プランをなす。検出面から約1.5mの深さで、長軸2.5m、短軸1.8mをはかる楕円形の平坦面を形成する。そこからさらに一段深く、直径約0.8mの円形に0.75m程度掘り下げて、集水部としていた。集水部には井筒として掘えられていた直径約0.7mをはかる木桶が残存していた。

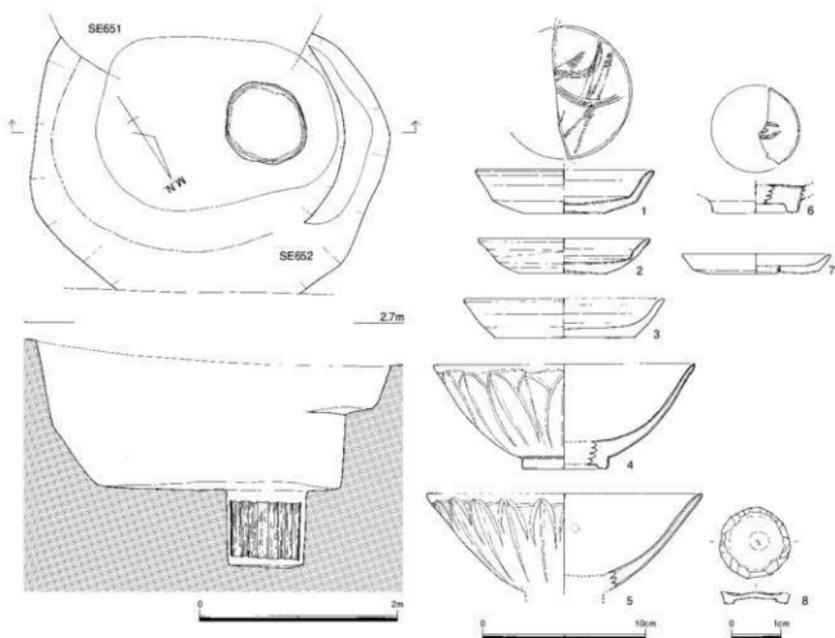
掘方埋土は暗褐色土と灰色粘土ブロックが混じる黄褐色砂である。井筒埋土は黄褐色砂を多量に含む暗褐色土で、集水部に近づくにつれて粘性が増す。

出土遺物から13世紀中頃～14世紀初頭の遺構であると考えられる。

[出土遺物 (第24図)]

1～5は堀方、6～8は井筒から出土した。

1は櫛歯文で見込みを装飾する同安窯系青磁皿Ⅰ類、2は青味のある灰乳色の釉を施す白磁皿である。体部外面下位は露胎となる。同安窯系青磁皿Ⅰ類の模倣品か。3は底部が糸切り調整された土師器坏である。4は龍泉窯系青磁碗Ⅱ類で釉色は黄味がかかった暗緑色。5は龍泉窯系青磁碗Ⅲ類で、6は龍泉窯系青磁碗Ⅱ類。7は土師器小皿で、底面には回転糸切りと板の圧痕がのこる。8は青白磁皿の底部を円盤状に加工したものである。



第24図 SE652実測図 (S=1/5)・出土遺物実測図 (S=1/2・1/3)

④ 櫛列

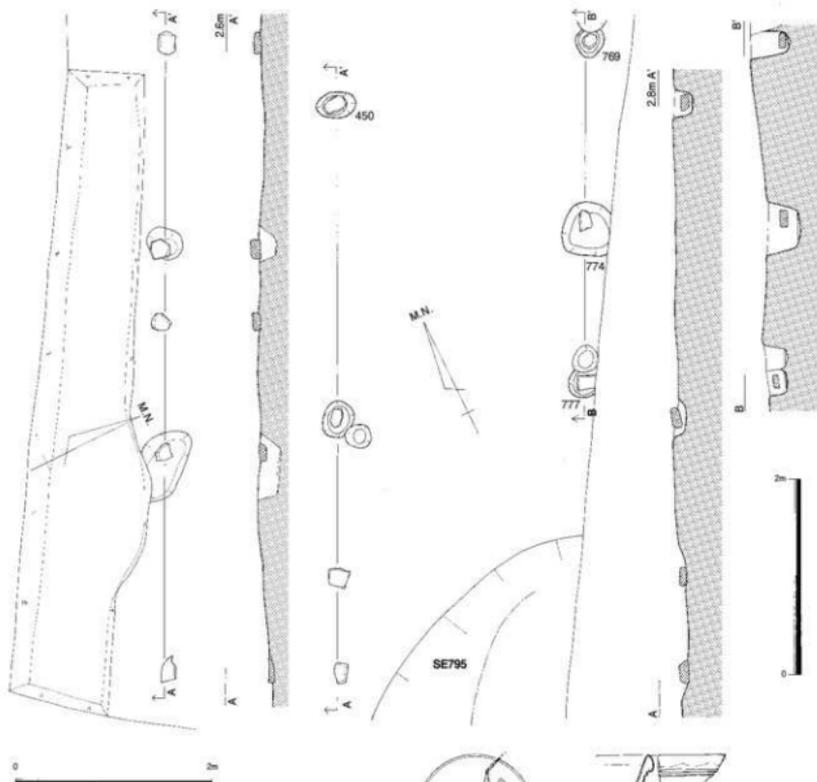
SA901 (第25図)

第1面の調査区南隅に位置する。小型の礎石と思われる板石が、南東-北西方向に6.7mにわたって列状に検出された。ただし、板石と板石の間の距離は、南東から順に2.15m、1.3m、0.8m、2.1mと規則性がなく、また、板石にともなう柱穴等も明確でない。しかし、板石が検出された方向が現在の街割の主軸に沿うものであり、また、検出されたレベルも標高2.2m~2.3m付近に集中することから、櫛列の可能性があると推定し、報告するものである。

出土遺物はなく、時期の詳細は不明である。

SA902 (第6図・第26図)

調査区南東辺中央部に位置する。小型の礎石と思われる板石を、北東-南西方向に平行して2列検出した。北西側の板石群は第2面において確認したもので、全長は6m、板石間の距離は南西から順に1m、1.65m、3.2mをはかる。一方、南西側のSP769・774・777の板石群は第3面において確認し、全長は3m、板石間の距離は南西から1.7m、1.8mをはかる。北西側と南東側の板石群の間の距離は約2.5mである。これらの板石群が検出された方向が現在の街割の主軸に沿うものであり、また、検出されたレベルも標高2.4m~2.5mにそろうことから、櫛列の可能性があると推定し、報告するものであ



第25図 SA901実測図 (S=1/50)

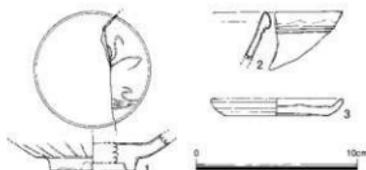
る。しかし、各群の板石の位置は対をなすことはなく、また、検出面も異なることから、2つの板石群は別のものとも考えることもできる。と

とくに、南東側の板石群は、板石間の距離が一定であることから、東側の調査区外へと展開する建物の一部である可能性もある。

出土遺物から、南東側の板石群は13世紀後半～14世紀初頭の遺構とおもわれる。北西側の板石群にともなう柱穴から遺物は出土しなかった。

[出土遺物 (第26図)]

1はSP777、2はSP769、3はSP774から出土した。1は内面見込に草花文が施される龍泉窯系青磁碗Ⅱ類で、2は白磁碗、3は13世紀末～14世紀初頭の所産と推定される土師小皿である。



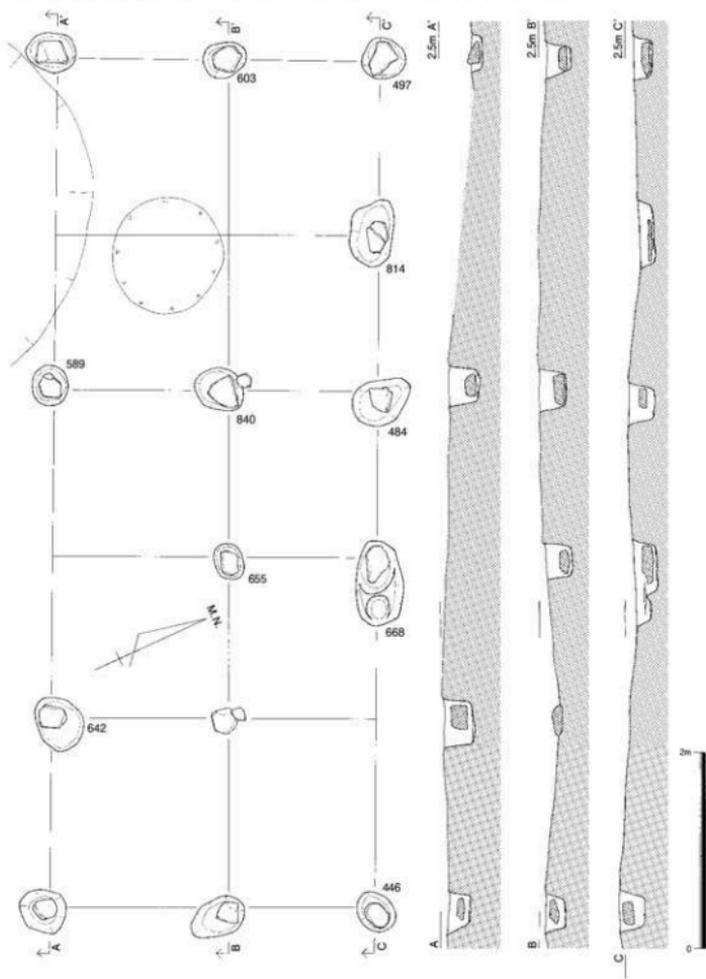
第26図 SA902実測図 (S=1/50)・出土遺物実測図 (S=1/3)

⑤ 掘立柱建物

SB903 (第6図・第27図)

調査区のはほぼ中央に位置する、北西-南東方向を桁行とする桁行5間、梁行2間の掘立柱建物である。SP603・497・589・484・655・668・642・446は第2面、そのほかは第3面において検出した。

桁行における柱間距離は1.6m~1.7m、梁行における柱間距離はAA'列とBB'列の間が1.75m、BB'列とCC'列の間が1.5mをはかる。各柱穴の板石の標高は2.2m~2.4mにそろそろ。



第27図 SB903実測図 (S=1/50)

各柱穴は直径0.3m～0.5m程度の不整形円形プランをなし、小型の礎石と考えられる板石の標高は、2.2m～2.4mをはかる。柱穴の埋土は暗褐色砂質土あるいは黒褐色砂質土で、ともに黄白色砂を多く含むものであった。出土遺物は、土師器・陶磁器・瓦器等の細片が多く、時期の詳細は不明である。しかし、柱穴のほとんどが第2面から検出されていることから、第2面の遺構として報告する。

(3) 第3面・第4面の遺構と遺物

① 土坑

SK715(第28図・図版5-7)

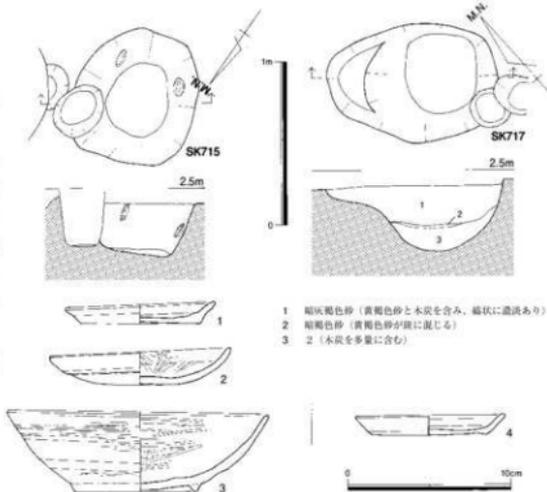
第3面で検出した、調査区東隅に位置する土坑である。北東側を別の遺構にきられる。直径約1.2mをはかる不整形円形プランをなす。検出面の標高は2.4mをはかり、検出面から0.3m程度残存していた。埋土は黄褐色砂を多く含む黒褐色砂である。

出土遺物から12世紀末頃～13世紀初頭の遺構であると考えられる。

【出土遺物(第28図)】

1は土師器小皿である。底部は糸切りによって切り離され、板の圧痕が残る。12世紀末～13世紀初頭の所産である。

2は瓦器小皿である。底部には糸切り調整の痕跡が残り、内面の中位～見込みは放射状のヘラミガキで仕上げられている。3は筑前型瓦器碗である。12世紀前半のものか。



第28図 SK715・717実測図 (S=1/30)・出土遺物実測図 (S=1/3)

SK717(第28図)

第3面で検出した、SK717の北西に位置する土坑である。南東側を別の遺構にきられる。長軸約1m、短軸約0.8mをはかる楕円形プランをなす。検出面の標高は2.4mをはかり、検出面から0.4m程度残存していた。埋土は暗灰褐色砂～暗褐色砂を基本とする。出土遺物から12世紀末頃～13世紀初頭の遺構であると考えられる。

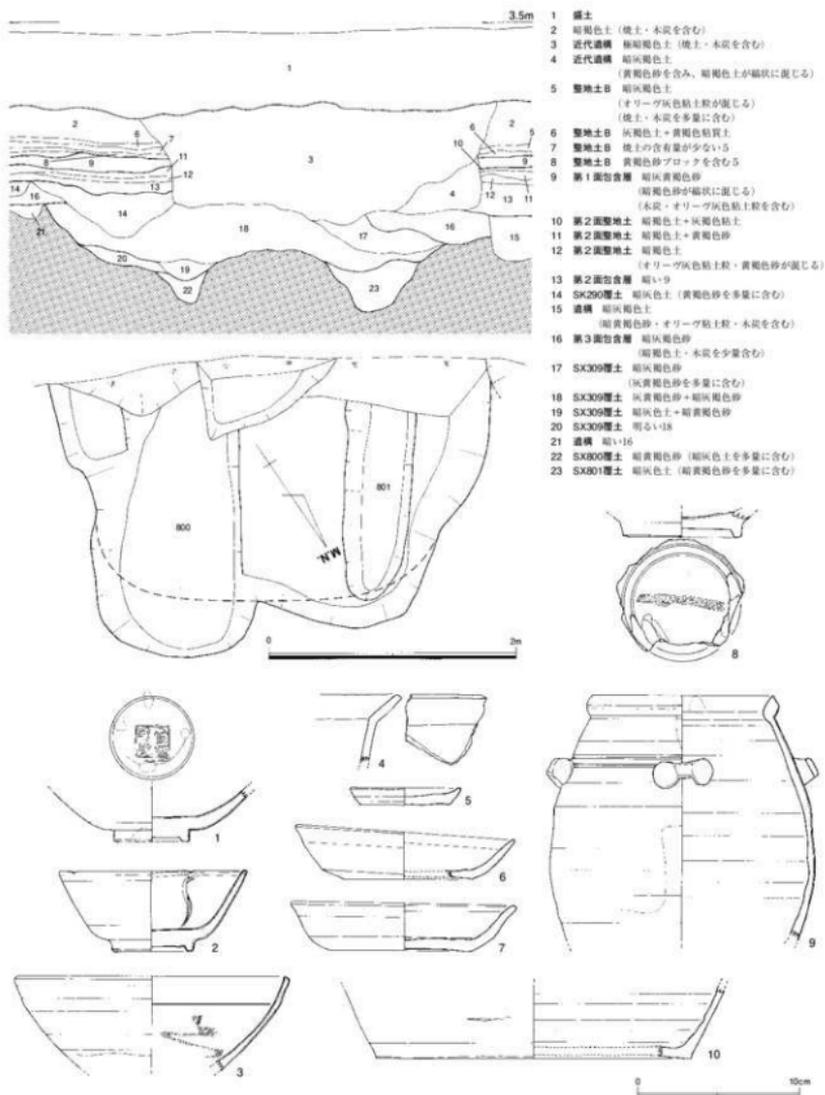
【出土遺物(第28図)】

4は土師器小皿。底部は糸切り調整され、板の圧痕が残る。内底面は定方向にナデ調整される。

② そのほかの土坑

SX309(第29図・図版5-5・6)

調査区南西辺中央部に位置する遺構である。南西側は調査区外へと続く。第2面において検出した太平洋戦争中の遺物が出土した近代の遺構(土層3・4)を、SE306のような井戸と誤認してそのま



第29図 SX309・800・801実測図 (S=1/40)・出土遺物実測図 (S=1/3)

ま第4面まで掘削を続けたため、本来第4面において検出されるべきSX309を平面的に認識して掘削することができなかった。検出面から0.8m程度掘削した標高1.5m付近においてSX800・SX810を検出したことから、SX309の存在を土層断面において認識し、この誤りに気がついた。SX800・SX810は、北東端をSX309の壁を拡張して掘削したことから、SX309の下部遺構ではなく、後述の「(5) 第4面以下の調査」において述べる第4面以下のものである可能性が高い。

以上のような遺構掘削時のミスから、正しいSX309の平面プランをつかむことはできなかったが、おそらく、第17図の平面図に示した点線部分が、SX309の平面プランであると推測される。この推測が正しければ、SX309は北西-南東方向の幅は約3.5m、北東-南西方向の幅は2.2m以上の規模をもつ不整楕円形のプランをなす。また、遺物を分けて掘削することができなかったため、遺構の時期を正確に捉えることはできないが、第17図5を近代の遺構の出土と想定すれば、13世紀前半代の遺構と考えられる。

〔出土遺物 (第29図)〕

3はSX800、8はSX801、それ以外はすべて近代の遺構およびSX309から出土した。

1は龍泉窯系裂磁碗Ⅱ類である。内面見込みに重ね焼きの痕跡が残る。2は青緑乳色の釉がほどこされる龍泉窯系青磁小碗で、端部に口縁を五等分する輪花をもつ。3は同安窯系青磁碗Ⅱ類。4は土鍋。5は土師器小皿、6・7は土師器坏である。5～7は底部に糸切りの痕跡と板の圧痕がのこる。5は14世紀前半の所産である。8は白磁碗Ⅶ類で、外底部に「一」の墨書がある。9は茶褐色の胎土に白色の釉がほどこされた中国陶器四耳壺である。10は高麗無釉陶器である。

③ 井戸

SE807 (第30図・図版5-8)

第3面で検出された調査区北西部に位置する井戸である。南東側を別の遺構にきられる。

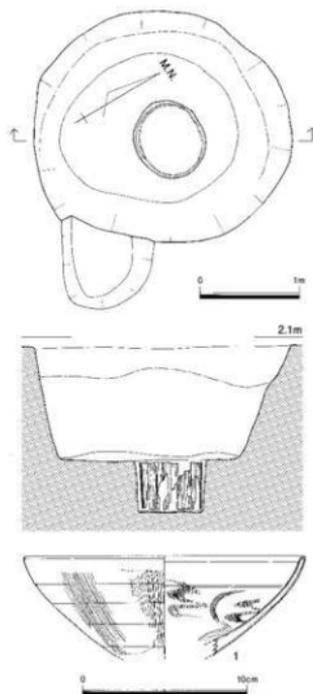
堀方は直径約2.5mをはかる不整円形プランをなす。検出面から1.25mの深さで短軸1.5m、長軸1.8mの楕円形の平坦面を形成し、そこからさらに一段深く、直径0.75mの円形に0.55m程度掘り下げて、集水部としていた。集水部には井筒として据えられた、直径約0.7mをはかる木桶が残存していた。

掘方埋土は暗褐色土を含む暗黄褐色砂で、井筒埋土は灰褐色粘質土で集水部に近づくにつれて粘性が増す。井筒内からは拳大の石が多量に出土した。

遺物の出土量が少なく、時期も決め手を欠く。

〔出土遺物 (第30図)〕

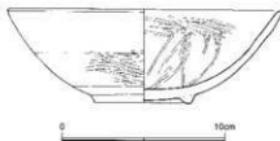
図示した遺物は、堀方埋土から出土した同安窯系青磁碗Ⅰ類である。淡青緑色の釉がほどこされる。12世紀中頃～後半の所産である。このほかに土師器・須恵器・陶磁器等が出土したが、いずれも細片のため図化し得ない。



第30図 SE807実測図 (S=1/50)
出土遺物実測図 (S=1/3)

SE795 (第4・6図)

第3面で検出された調査区南隅に位置する。南東側半分は調査区外へと続いたため、検出面から約1.25m掘削したところで、人力掘削を中止した。平面形は直径5mをはかる円形プランをなすと思われる。また、遺構の埋土は暗褐色土が塊状に混じる暗黄褐色砂を主体とする。掘削を途中で終了のため、下層の構造を把握することができなかったが、規模や平面プラン、埋土の状況から、井戸と推定し報告する。



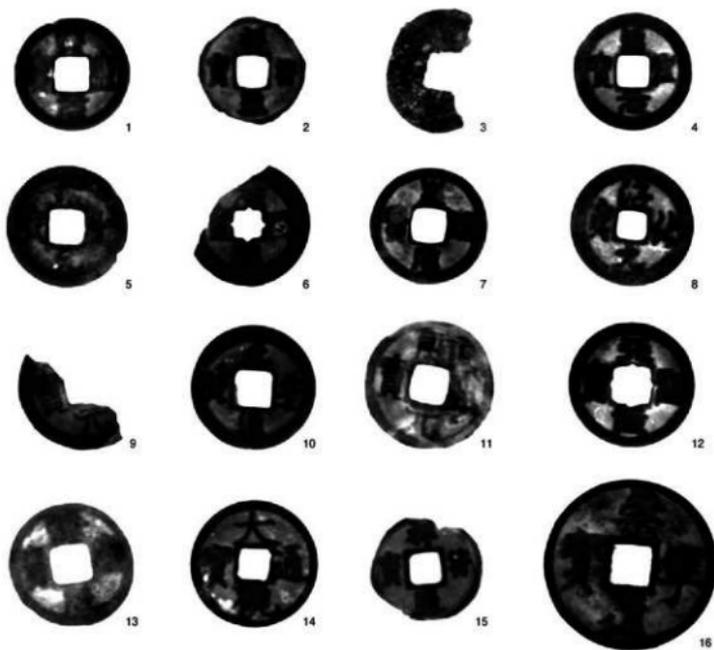
第31図 SE795出土遺物実測図 (S=1/3)

[出土遺物 (第31図)]

図示した遺物は筑前型瓦器碗である。高台の下面には、高台を貼り付けた直後に板の上に置いたとおもわれる痕跡がある。12世紀前半の所産である。

(4) そのほかの出土遺物

① 銅銭 (第32図・第1表)



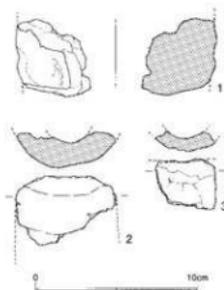
第32図 出土銭X線写真 (S=1/1)

本調査では、総数16枚の銅銭が出土し（第1表）、そのX線写真を第32図に示した。出土したすべての銅銭が、第1・2面において検出した、13世紀後半～14世紀中頃の遺構・包含層からの出土である。1つの遺構から集中して出土することはないため、遺失銭であるといえる。出土状況や時期、銅銭の構成の傾向は、博多遺跡群や箱崎遺跡における出土銅銭の傾向と変わらない。

第1表 出土銭一覧

No.	出土遺構	出土銭名	王朝	初鑄年
1	SK017	熙寧元寶	北宋	1068 (熙寧元年)
2	SP068	祥符通寶	北宋	1009 (大中祥符二年)
3	SP092		不明	
4	SK143	紹聖元寶	北宋	1094 (紹聖元年)
5	SP211	紹聖元寶	北宋	1094 (紹聖元年)
6	SK217上層	元祐通寶	北宋	1086 (元祐元年)
7	SE306	皇宋通寶	北宋	1038 (寶元元年)
8	SX309検出面	淳化元寶	北宋	990 (淳化元年)
9	SP449	□□元寶	不明	不明
10	SK582	元豊通寶	北宋	1078 (元豊元年)
11	SK606検出面	開元通寶	唐	641 (武徳元年)
12	SK653	天聖元寶	北宋	1023 (天聖元年)
13	SK653		不明	
14	1面遺構検出面	大觀通寶	北宋	1107 (大觀元年)
15	1面遺構検出面	祥符通寶	北宋	1009 (大中祥符二年)
16	1面下掘下(6)	崇寧通寶(当十銭)	北宋	1103 (崇寧元年)

② 製鉄関連遺物 (第33図)



第33図 製鉄関連遺物実測図
(S=1/3)

製鉄関連遺物としては、鍛冶滓および少量の炉壁が合計約90点3.435g、送風管羽口が2点出土した。

出土した鍛冶滓の表面には、鍛冶剥片と小炭が認められる。「(2)第1面・第2面の遺構と遺物」において既に述べたSK056(第14図)から最も多い25点が集中して出土しており、これらのうち2点の碗形滓については図版6-1・2に示した。そのほかの鉄滓は、そのほとんどが第1・2面において検出した、13世紀後半～14世紀中頃の遺構・包含層からの出土であり、とくに出土傾向等に偏りはみられない。

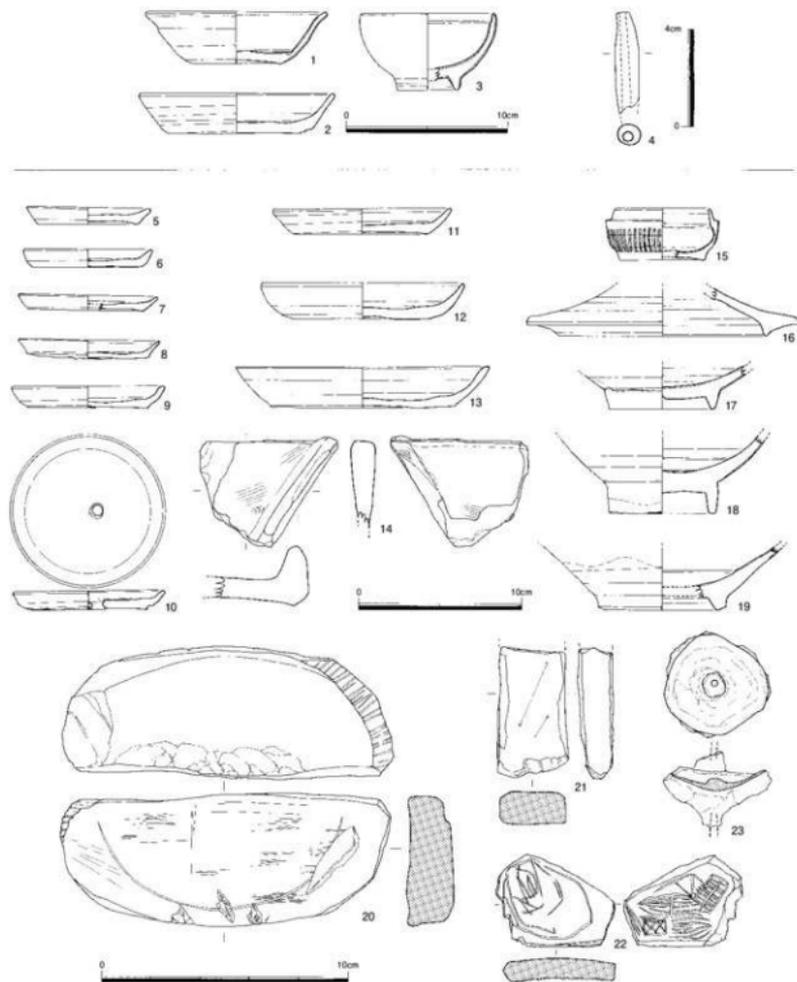
第36図には送風管羽口を示した。1はSP547、2は309検出面、3はSK529から出土したものである。1はるつばあるいは取瓶の底部付近と考えると図化した。唯一遺存している外面も被熱して表面が荒れている。2・3は、小礫を大量に含む粗い胎土をもち、外面は全面ガラス化している。2の復元径は直径7.4cmをはかる。3は廃棄後に被熱してゆがんでおり、径を復元することはできない。

③ 包含層出土遺物 (第34図・第35図)

第34図1～4は1面遺構検出時に出土したものである。1は口壳げの白磁皿区類で、外底面には板状工具で軸がぬられた痕跡が残るタイプのものである。2は土師器坏で、底部は糸切調整される。内底面はナデ調整されない。3は口壳げの青磁小碗で、口縁端部と畳付をのぞく全面にくすんだ青緑色

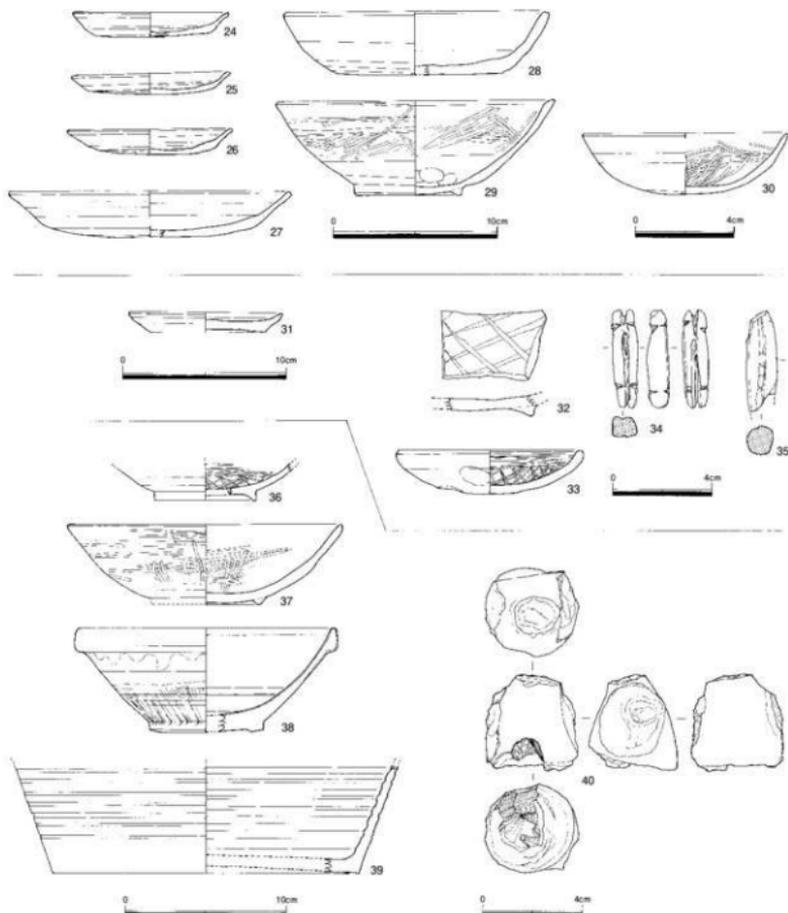
の釉がほどこされる。胎土は淡橙色。1～3は13世紀後半～14世紀前半の所産である。4は重量3.12gをはかる土錘である。

第34図5～22は第1面包含層から出土したものである。5～10は土師器小皿、12・13は土師器坏である。内底面は定方向にナデ調整が加えられ、底は糸切り調整される。5・6以外には外底部に板の圧痕が残る。10は焼成後両面穿孔される。12は内面全体にススが付着する。5・6は14世紀前半～14世紀中頃、7～10・13は12世紀後半～13世紀代、12は13世紀末～14世紀初頭の所産である。14は五徳



第34図 包含層・整地層出土遺物実測図① (S=1/2・1/3)

状の土製品か。胎土は小礫を多く含むやや粗いもので、被熱したとおもわれる内面を中心にスガが付着する。15は青緑乳色の釉がほどこされる青白磁合子である。16は無軸の中国陶器壺蓋。灰白色～黒灰色を呈する。17・19は内面見込の軸を輪剥ぎする白磁碗Ⅲ類で、どちらも灰乳色の釉がほどこされる。12世紀中頃～後半のものである。18は11世紀後半～12世紀前半に出土する白磁碗Ⅴ類。灰乳色の釉は被熱しており発泡している。20は滑石製石鍋底部の再加工品で、温石として利用したものか。石材は淡赤灰色を呈する。21は重量31.9gの砂岩製砥石で、全面に使用痕跡が残る。22は滑石製品の再加工品で、両面に線刻が残る。石色は黒灰色。23は鉄製紡錘車である。メタル反応はなく遺存状況は悪い。断面形はX線写真をもとに作図した。



第35図 包含層・整地層出土遺物実測図② (S=1/2・1/3)

第35図24～30は第5図に示した第2面整地層から出土した。24～26は土師器小皿、27・28は土師器杯。24～27はヘラ切りで、28は糸切りで底部が切り離され、内底面には定方向のナデ調整がほどこされる。24～27は11世紀中頃～12世紀前半、28は12世紀中頃～後半の所産である。29は12世紀後半の筑前型瓦器碗、30は瓦器小碗である。29・30ともに底部は指オサエの後、回転ナデ調整される。

第35図31～35は第2面包含層から出土した。31は12世紀中頃～後半の土師器小皿である。底部は糸切り調整され板の圧痕が残り、内底面は定方向のナデが加えられる。32・33はそれぞれ和泉型の瓦器碗、瓦器杯である。ともに12世紀代のものか。34・35は滑石製鉢である。34は暗灰色で重量6.1g、35は淡灰色で重量9.2gである。35は紐掛け部分が浅く不整形であり、未製品の可能性がある。

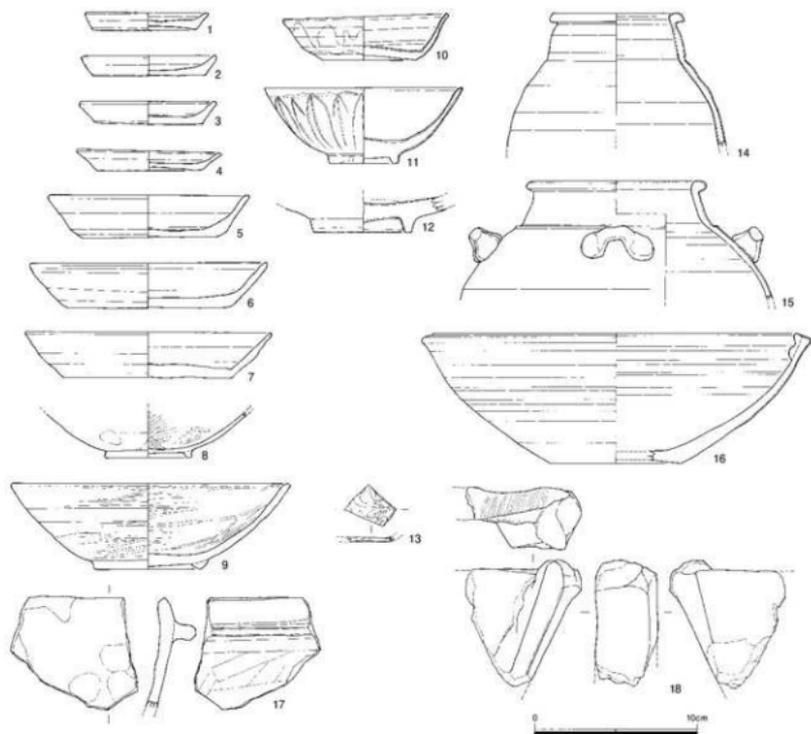
第35図36～40は第3面包含層から出土したものである。36は和泉型瓦器碗である。12世紀前半のものか。37は12世紀中頃の筑前型瓦器碗で、体部外面に屈曲部を残し、屈曲部以下をヘラケズりする。38は11世紀後半～12世紀後半に出土する白磁碗Ⅳ類で、外面の体部中位以下の露胎部分には飛びカンナの痕跡が明瞭に残る。灰白色の釉が施される。39は高麗陶器甕である。胎土は赤褐色、器表は暗灰色を呈する。40は頭部と両腕、下半身が失われた土製人形である。胴部前側中央に工具による抉りをもつ。

④ そのほかの遺構からの出土遺物（第36図・第37図・図版6～10）

出土遺構は各遺物の番号に添えて記述した。また、（ ）内の数字は検出面を示している。

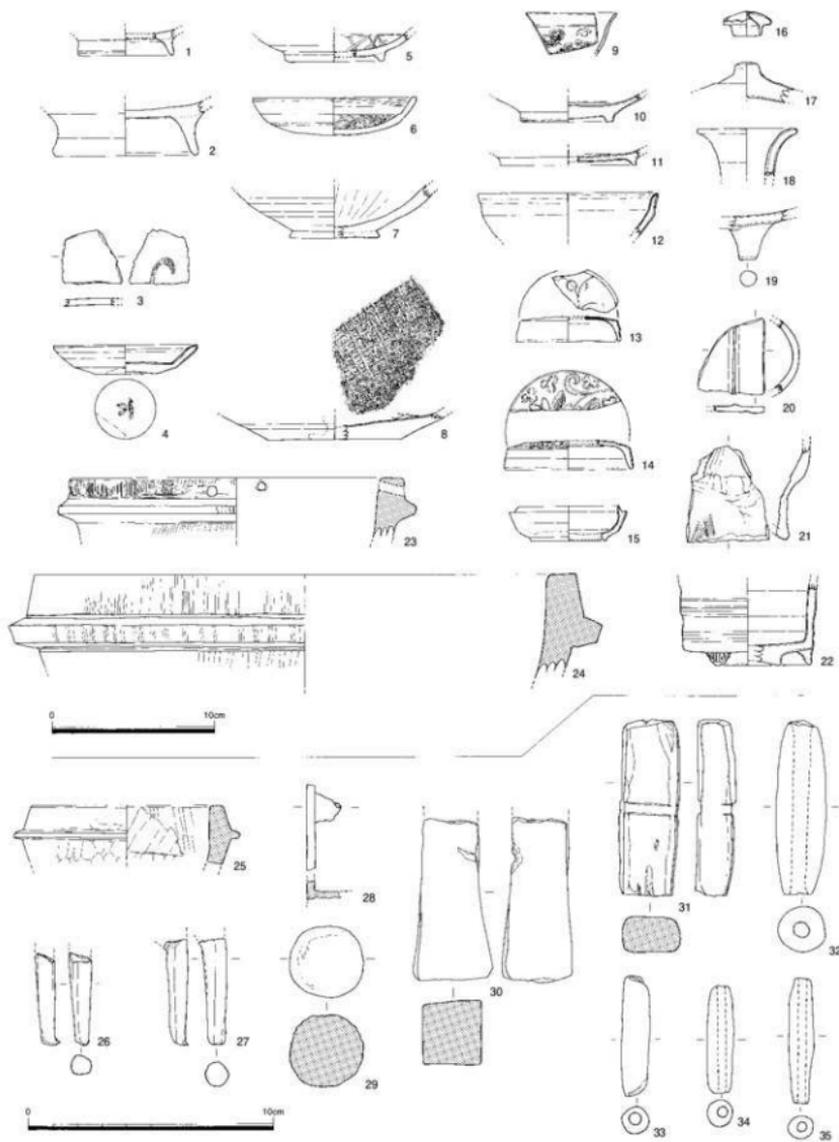
【第36図】1～4は土師器小皿、5～7は土師器杯である。すべて糸切りによって底部が切り離され、1をのぞいて板の圧痕が残る。また、1・5をのぞいて内底面に定方向のナデ調整が加えられる。1～3・5は13世紀末～14世紀初頭、4は13世紀前半、6・7は12世紀末～13世紀初頭の所産である。8・9は瓦器碗で、8は器壁が薄く高台も断面方形に近いもので、小型品である。9は筑前型で、12世紀代のものか。10は13世紀後半～14世紀前半に出土する口禿げの白磁皿Ⅲ類で、底部が露胎となるタイプのものである。11は龍泉窯系青磁小碗Ⅱ類で、青緑乳色の釉が施される。12は全面施釉される龍泉窯系青磁碗Ⅲ類とおもわれるが、釉は灰色味の強い青緑色で発色が悪く、内面見込みに目跡が残ることから、粗雑な印象をうける。13は青白磁杯あるいは皿の底部で、内面には青乳色の釉が、外面には透明な釉がほどこされる。14は中国陶器甕である。口縁部の釉を拭き取ることなく全面施釉される。釉色は暗赤褐色～黒褐色。13世紀後半～14世紀前半のものである。15は中国陶器四耳甕で、褐色粒を含む橙色の胎土に白色の化粧土がかけられ、その上からオリブ黄白色の釉がほどこされる。口縁端部には目跡が残る。13世紀代のものか。16は中国陶器こね鉢で、赤褐色の化粧土がハケのようなもので塗られており、外面には茶褐色の釉がかけられる。17は土師質土器土鍋で、外面にはススが付着する。18は第1面包含層でも出土した、五徳状の土製品か。胎土は小礫を多く含みやや粗い。上端部にハケ状工具によるナデ調整がほどこされる。

【第37図】1・2は高台をもつ土師器で、1は皿、2は碗または杯か。当該期に通行の器形ではなく、住吉神社出土例などを考えれば宮崎宮の祭祀等にかかわる遺物の可能性がある。3・4は底部に墨書のある陶磁器で、3は中国陶器、4は12世紀中頃～後半に出土する龍泉窯系青磁小皿Ⅰ類である。3は内面にのみうすく施釉され、4は暗オリブ色の釉が施される。5は12世紀前半の和泉型瓦器碗で、6は筑前型瓦器小碗である。底部は糸切り調整された後、押し出されている。7は当該期に通行の器形ではない瓦器碗である。在地で製作されたものとおもわれる。時期が異なるものの、高台の形態は8世紀～10世紀中頃に出土する越州窯青磁碗Ⅱ類に類似する。8は瀬戸焼餅皿で、底部は糸切り調整され、内外面に淡暗緑色の釉をほどこしている。13世紀後半のものか。9は型作りで製作された口禿げの景德鎮窯産白磁碗で、10・11は青白磁碗あるいは皿である。10は壺付から外底面を露胎とするが、11は壺付も含めて全面に施釉する。12は龍口の承目天目碗。13・14は青磁合子蓋で、淡く明る



第36図 そのほかの出土遺物実測図① (S=1/3)

い緑色の釉をほどこす。13世紀代か。15は青白磁合子で、軸は緑がかった青乳色である。16・17はそれぞれ青磁、白磁の蓋。16の天井部には小さな円形の孔が穿たれている。軸は龍泉窯系青磁皿Ⅲ類のように青緑色で厚く、天井部の小孔の内側にもおよぶ。17の軸は艶のない乳白色である。18・19は龍泉窯系青磁の花生と三足脚付香炉で、暗緑色の釉が厚くほどこされた優品。18は口縁端部、19は脚端部の釉がはぎ取られている。20・21は土製人形の一部である。ともに無釉で胎土は赤橙色を呈する。22は龍泉窯系青磁三足脚付香炉である（図版6-10）。高台の高さと脚の高さは同程度で、13世紀頃のものか。青緑乳色の釉が厚くほどこされた優品である。23・24・25は滑石製石鍋。23は灰褐色、24は淡赤灰色、25は黒色の石材を用いている。25はミニチュア品である。23・25はともに破面が研磨されていることから、破損後再利用しようと試みたものとおもわれる。26・27は瓦質土器足鍋のミニチュア品。同一個体かどうかは不明である。28は暗赤褐色を呈する赤間石製の硯。29は石製投弾で、表面に敲打痕がのこる。重量は30.6gをはかる。30は砂岩製の砥石で、長軸方向4面すべてを使用している。重量は87.6g。31は淡赤灰色の石材を用いた滑石製錘で、重量は58.5gをはかる。32-35は土製錘である。32のみ全長7.05cm重量22gでやや大型、残りの33-35は全長4.4cm-5.1cmで重量も4.9g-5.8g程度にせろう。



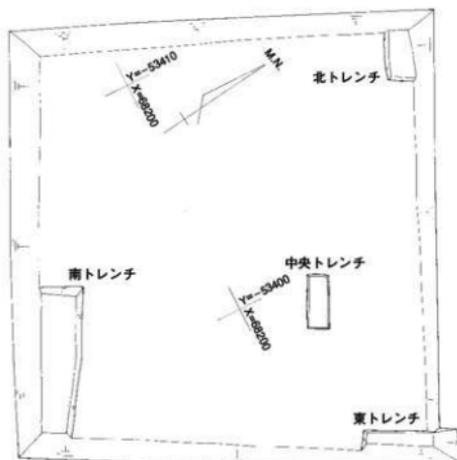
第37図 そのほかの出土遺物実測図② (S=1/2・1/3)

(5) 第4面以下の調査

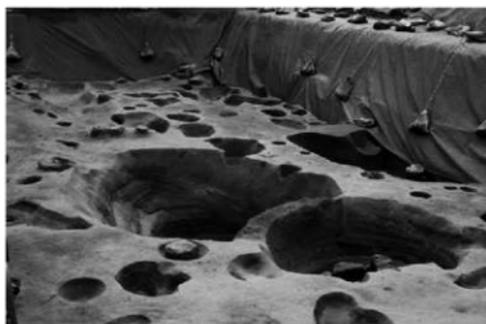
「(1) 調査の概要」において既に述べたように、第4面の調査では、調査区北側を最高所として、中央部から南へ向かって比高差0.5mをもって低く傾斜する地形をなしており、遺構の密度がうすく、人間活動が低調であったことを確認した。しかし、SE306の壁面に南へ傾斜する土層の不整合がみられたことから(第39図)、第4面以下の地形の確認と遺構・遺物の有無を確認するために、調査当初から土層を確認するために先行して掘削していた北トレンチおよび南トレンチにおいて、第4面以下の砂層の掘り下げを行った。その結果、北トレンチにおいては、第4面以下の砂層から遺物の出土はなかったが、南トレンチでは、第4面以下の標高1.1m付近で、第34図に示した遺物が出土し、生痕とみられる暗褐色土の埋土をもつ直径0.2mほどの不整形の小穴を2つ検出した。これをうけて、調査区中央部と調査区南東辺にも新たにトレンチを設けて、確認のために第4面以下の砂層の掘削を行った結果、中央トレンチからは遺物の出土はなく、東トレンチからは白磁・土師器等の細片がごく少量出土した。

以上の調査結果を総合すると、第4面以前の調査区内の地形は北側を最高所とし、比高差約1mをもって南側へ大きく落ち込む谷地形をなし

ていると考えられ、SE306壁面に認められた南へ傾斜する砂層(第39図)はこの谷地形の埋没土である可能性が高く、調査区南部において第4面以下の砂層に含まれる遺物はこの埋没土に由来するものと解釈することができる。また、調査区南西部に位置するSX309の下部(標高1.5m付近)や南トレンチ下部(標高1.1m付近)において検出されたSX800・801や生痕は、この谷地形が埋没する以前、あるいは埋没する過程で形成されたものと推測できる。このように考えると、南トレンチ出土遺物やSX800・SX801出土遺物(第40図・第29図3・8)は12世紀代のものであり、谷地形は12世紀前半以前から存在しており、12世紀代にゆっくりと埋没していったとおもわれる。



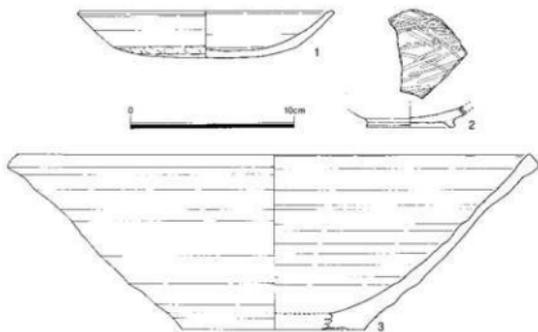
第38図 トレンチ配置図 (S=1/200)



第39図 第3面調査区南隅 (北西から)

〔出土遺物（第40図）〕

1・2は標高1.1m付近で出土した。1は土師器坏で、底部はヘラ切りによって切り離され、板の圧痕が残る。外面の底部付近には指オサエが観察され、内底面は定方向にナデ調整される。12世紀前半のものである。2は瓦器小碗。底面には指オサエの跡が残る。3は東播系須恵器こね鉢である。11世紀末～12世紀前半の所産か。



第40図 南トレンチ出土遺物実測図 (S=1/3)

第4章 まとめ

第4面以下の調査によって、本調査地点の12世紀以前の旧地形が、北側（博多湾側）から南側（筥崎宮側）へ比高差約1mをはかる谷地形をなしていたことが判明した。本調査地点を、箱崎遺跡全体が展開する大砂丘のなかで捉えるならば、大砂丘を構成する小規模な砂丘と砂丘の間の谷部に位置しているといえるだろう。南トレンチおよびSX800・801の調査成果から、谷は少なくとも12世紀前半には存在しており、12世紀後半までの比較的長い期間をかけて徐々に埋没していったようである。このため、12世紀後半に形成された第3面包含層によって完全に谷地形が埋没するまで、本調査地点における人々の活動は低調であった。

このような地形的要因はその後の遺構の展開にもあらわれている。本調査地点では、12世紀末～13世紀初頭から遺構が展開を始めるが（第3面）、調査区全体で遺構密度が高くなるのは、13世紀中頃～14世紀前半になってからである（第1面・第2面）。一方、標高の高い北東側64次調査地点では、12世紀代から14世紀前半まで継続的に遺構が展開し、井戸が多い本調査地点に比べて、廃棄土坑や街割に沿う溝などの集落の中心と考えられる遺構が検出され、出土遺物量も多い。

本調査では、箱崎遺跡全体からみれば、これまでの調査成果から判明している西側緩斜面の集落の展開に沿う成果をあげることができた。しかし、西側緩斜面の集落展開の在り方というより細かい視点からみれば、隣接する64次調査の成果とともに、旧地形の在り方によって集落の展開に濃淡があることを示す好例となったといえるだろう。

附論

箱崎遺跡第67次調査出土動物遺存体について

福岡市教育委員会埋蔵文化財第2課 屋山 洋

箱崎遺跡は博多湾に面した砂丘上に位置する古墳時代～近世の複合遺跡である。古代には太宰府の対外貿易港である「箱崎ノ津」と、その拠点として10世紀前半に創建された箱崎八幡宮を中心に発展し、12世紀には唐人街が形成されるなど博多遺跡と同様に対外貿易で繁栄した貿易都市である。

今回報告する67次調査区は箱崎遺跡でも西端の博多湾寄りに位置する。東側に比べて集落化した時期は遅く、12世紀代の遺構も若干みられるが本格的に遺構が増えるのは13世紀中頃からである。

今回の調査で出土した動物遺存体は表の通りである。このうち特筆すべきなのはSP0610から出土したウマの上顎白歯9本である(第15図、図版5-4)。写真では土が付着して分かりにくい、左頬側が5本、右頬側が4本で咬合面が上を向いた状態で出土した。左右の歯列は原位置を保って並び、ほぼ水平である。年齢は歯冠高が4～5cm前後を測ることから5～7歳前後の成獣と考えられる。ウマの白歯は本来左右6本ずつであるが、若干足りないのは頭骨が枯骨化したため埋納前に抜け落ちたか、遺構掘り下げ時に削った可能性が考えられる。0610は径30cm強の円形を呈し、深さ15cmを測る。井戸(SE306 14世紀前半)との切合いは不明である(井戸埋没中に掘り込んだ可能性も考えられる)。掘方径からウマの全身を埋葬したものとは考えられず、下顎歯が出土していないことから、頭骨だけが上下逆さまの状態で埋められたものと推定される。この出土状態からは井戸の廃棄に伴う祭祀に伴って埋納された可能性が考えられるが、古代以降井戸や溝、土坑から祭祀に使用されたウシ・ウマ等の頭骨の出土例は多く出土しており、博多遺跡群でも地下鉄IL区883号土壙や37次、102次、133次で確認されている。このうち37次のSX731土坑では頭骨の周囲から土師坏が多数出土して、祭祀の痕跡を留めている。骨はその他には061から魚類の骨が出土した。小片で魚種や部位は不明であるが、被熱のため白色化している。調理自体の加熱では白色化しないため、ゴミとして燃やされたものと思われる。また、1～2面間包含層から鳥類の脛足根骨が出土した。側面に切痕がみられ食用とされている。大きさからニワトリの可能性が高い。時代は13世紀中頃～14世紀前半と思われる。

小結 67次調査で出土したウマの歯は祭祀のため埋納された可能性が高いと考えられる。SE305との関係は明確ではないが、井戸廃棄に伴う可能性を考えたい。前述したように博多遺跡ではこれまでも祭祀に使用された可能性のあるウマの頭骨は出土しているものの、井戸に伴うものではなく14世紀前後の祭祀を考えると貴重な例といえる。

表 箱崎遺跡第67次調査出土動物遺存体一覧

遺構番号	層位	大分類	小分類	部位名	左右	部分1	成長度	切痕	火熱	備考	時代
001	0610	哺乳類	ウマ	上顎歯	右		成獣	なし	なし	歯冠高 50mm弱、L=24.2mm	14世紀中頃
002	0610	哺乳類	ウマ	上顎歯	右		成獣	なし	なし	歯冠高 46mm前後	14世紀中頃
003	0610	哺乳類	ウマ	上顎歯	右		成獣	なし	なし	歯冠高 40mm弱、L=23.7mm	14世紀中頃
004	0610	哺乳類	ウマ	上顎歯	右		成獣	なし	なし	歯冠高 50mm弱	14世紀中頃
005	0610	哺乳類	ウマ	上顎歯	左		成獣	なし	なし	歯冠高 45mm前後	14世紀中頃
006	0610	哺乳類	ウマ	上顎歯	左		成獣	なし	なし	歯冠高 50.3mm	14世紀中頃
007	0610	哺乳類	ウマ	上顎歯	左		成獣	なし	なし	歯冠高 40mm前後、L=24.3mm	14世紀中頃
008	0610	哺乳類	ウマ	上顎歯	左		成獣	なし	なし	歯冠高 40mm強	14世紀中頃
009	0610	哺乳類	ウマ	上顎歯	左		成獣	なし	なし	歯冠高 50mm前後	14世紀中頃
010	1面下掘り下げ	下層3	鳥類	不明	脛足根骨?	幹部小片	不明	あり	なし	太さはニワトリ程度	13世紀中頃～14世紀前半
011	0061		魚類	不明		小片	不明	不明	白色化		13世紀中頃～14世紀前半

※ウマの年齢推定は考古学と自然科学2「考古学と動物学」同成社のP176の表に基づく

※骨の測定には行政法人奈良文化財研究所の環境考古学研究室の現生資料を使用すると共に研究室の方々の助言を得た。

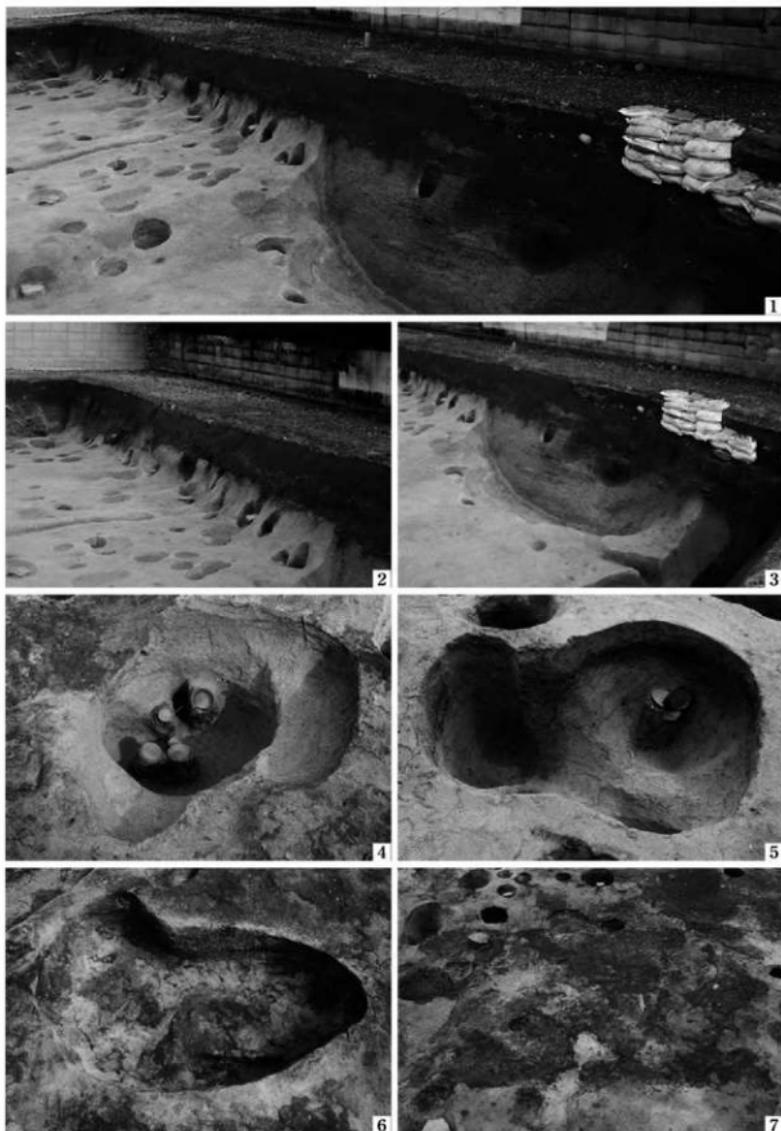


1. 第1面調査区全景（南西から）
2. 第2面調査区全景（南西から）

図版2



1. 第3面調査区全景（北東から）
2. 第4面調査区全景（北東から）



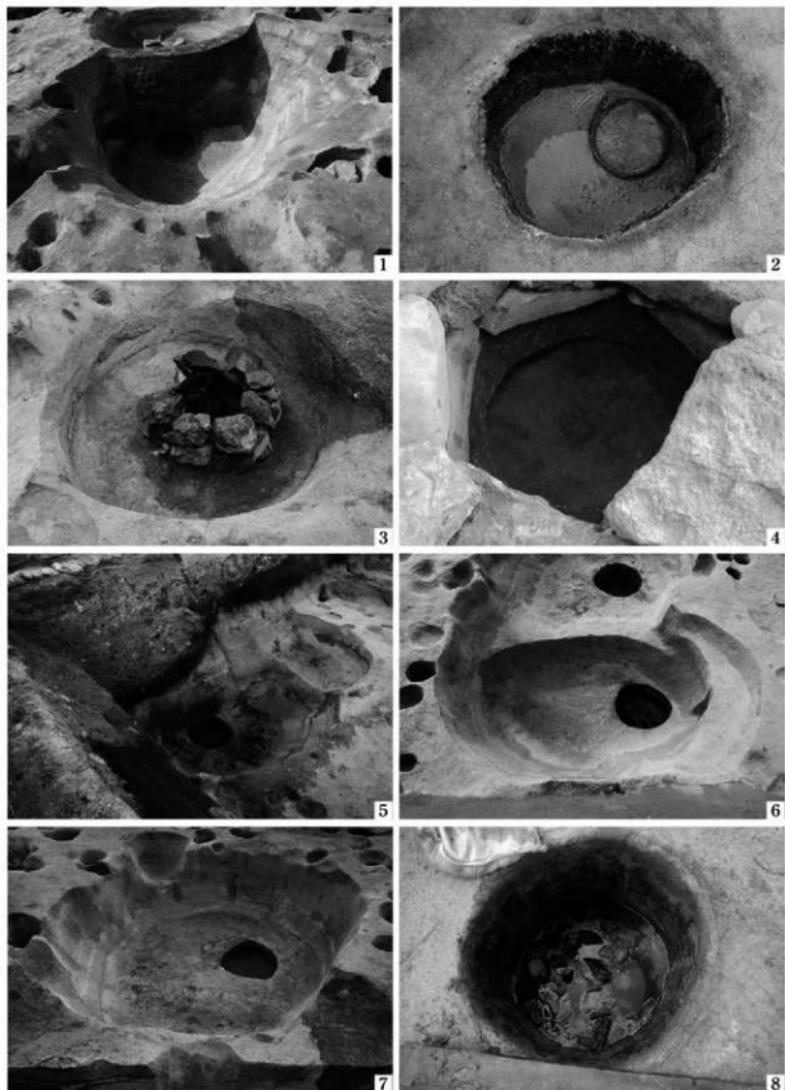
1～3 調査区南東壁土層（南西から）

4. SK247・248遺物出土状況（南西から）

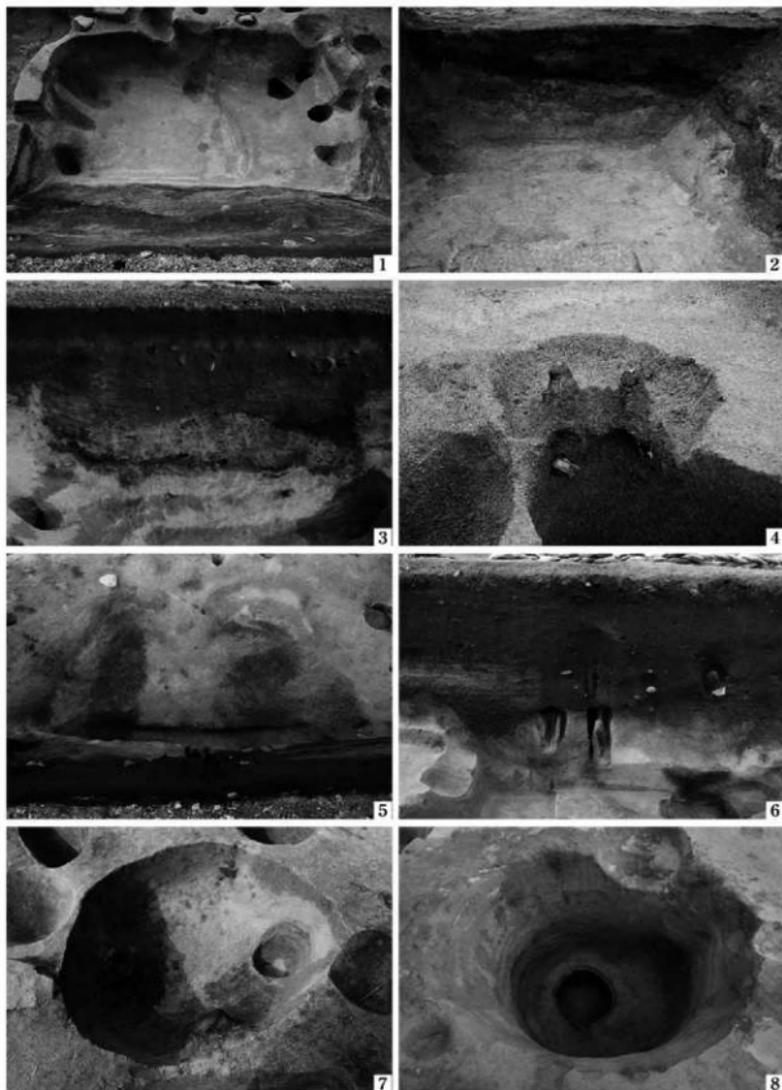
5. SK467遺物出土状況（北東から）

6. SK200遺物出土状況（南西から）

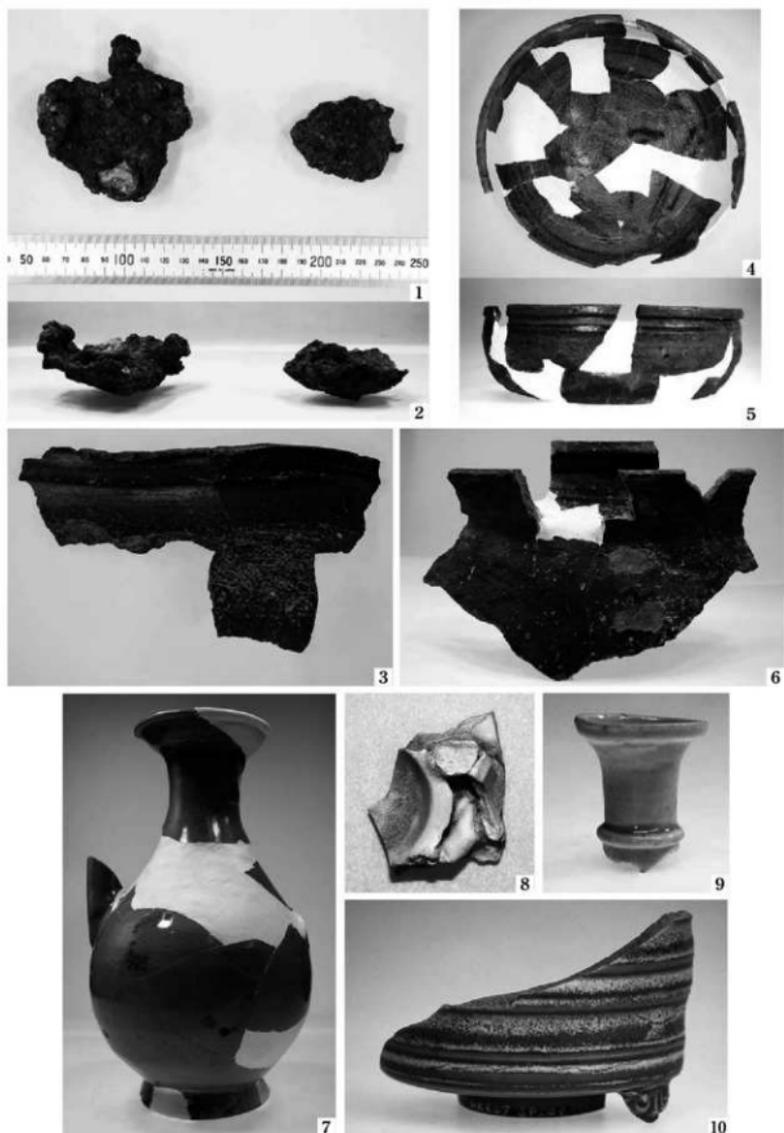
7. SK217遺物出土状況（南西から）



- | | |
|--------------------|-----------------------|
| 1. SE306 (東から) | 2. SE306井筒検出状況 (東から) |
| 3. SE307 (南から) | 4. SE307集水部検出状況 (南から) |
| 5. SE320・321 (南から) | 6. SE652 (北東から) |
| 7. SE651 (北東から) | 8. SE651井筒検出状況 (北東から) |



- | | |
|-------------------------|-------------------------|
| 1. SK653 (北東から) | 2. SK653土層 (南東から) |
| 3. SK653調査区北東壁土層 (南西から) | 4. SP610遺物出土状況 (北東から) |
| 5. SX309 (南西から) | 6. SX309調査区南西壁土層 (北東から) |
| 7. SK715 (南東から) | 8. SE807 (北西から) |



1·2. SK056出土碗形滓(平面·断面) 3. 第22图8
 4·5. 第16图3 6. 第23图13 7. 第18图11
 8. 第21图2 9. 第23图20 10. 第37图22

報 告 書 抄 録

ふりがな	はごぎきよんじゅうろく
書名	箱崎46
副書名	一箱崎遺跡第67次調査の報告一
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第1165集
編著者名	松尾奈緒子
編集機関	福岡市教育委員会
所在地	〒810-8621 福岡市中央区天神1丁目8番地1号 TEL092-711-4667
発行年月日	2012年3月16日

ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
はごぎきいせき	ふくおかしひがしく	40132	2639	33°61'70"	130°42'20"	20100927	271㎡	記録保存調査
だいろうくじゅう ななじょうき	はごぎきいっ ちょうめ					～		
箱崎遺跡 第67次調査	福岡市東区 箱崎一丁目					20101217		

	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
箱崎遺跡 第67次調査	集落	中世	土杭・井戸 掘立柱建物・横列	土師器・瓦器 国産陶器・輸入陶磁器 滑石製石製品 鉄滓・鉄製刀子 中国銭・瓦 黒曜石剥片 など	
要 約	<p>箱崎遺跡は、博多湾岸一帯に帯状に広がる、箱崎砂層とよばれる古砂丘の北端部に立地している。「箱崎津」を中心に日宋貿易が行われたことによって、中世を通じて博多とならぶ貿易都市として繁栄していたことが文献史学からも考古学からも明らかとなっている。本調査地点は、このような箱崎遺跡の西側斜面中央部に位置している。</p> <p>調査は、合計4面の遺構面を設置し、ベルトコンベアによって排土を処理しながら行った。調査の結果、本調査地点は、小規模な砂丘と砂丘の間の谷部に立地しており、12世紀後半に谷部が埋没してほぼ平坦化し、12世紀末から人々の生活の痕跡が確認されはじめ（第3面）、13世紀中頃～14世紀初頃（第1面・第2面）になると、井戸8基、方形土杭1基、横列・掘立柱建物などの遺構が濃密に展開する状況が明らかとなった。このようなあり方は、12世紀中頃以降に集落が砂丘西側斜面に展開するという周辺調査成果に沿うものである。</p> <p>遺物は、土師器・瓦器・輸入陶磁器・宋銭などを中心に、瓦・国産陶器・鉄製刀子・砥石・黒曜石剥片などの土器・石器・鉄製品が、コンテナケース39箱分出土した。</p>				

箱崎46

— 箱崎遺跡第67次調査の報告 —
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1165集

2012年（平成24年）3月16日

発 行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8-1
印 刷 株式会社 西日本新聞印刷
福岡市博多区吉塚8丁目2-15